

ロクでなし魔じゆ（ry……リエルすこ

背脂120%

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

本題

ロクでなし魔術講師と禁忌教典の世界に完全格闘系の主人公入れるけどヒロイン誰にしようか……、王道を行くきよぬー大天使ルミア様はヒロイン属性多目でバブみを感じて素敵だ。ツンデレ銀髪説教女神のひんぬーシスティーナも可愛げがあってよきかな……。だが俺はリエルを推す（不転の意思）。例えロリコンと言われようとリエルを推す。寧ろ俺はロリコンだ。何も問題なかったな（問題しかない）結局何が言いたいのかと言うと無口系怪力暴走アホっ子ロリのリエルすこ

あらすじ

全力でリエルをすこれ！

最低でも一ヶ月一回は更新

目次

脳筋と保護者	1
緊急停止イノシシ	7
被告人グレンIIレーダス	13
作戦開始	19
学院へ	25
事故紹介（誤字に非ず）	31
悪夢（尚グレンのみ）	37
水着回ではない（スク水はある）	42
裏切りの親バカ	48
真 水着回『副題：狂気のビーチバレー』	53
そうだ情操教育しよう	58
親離れ	63
番外編 クリスマスマッション	69
姉妹の対話	74
ふっかつのじゅもん	78
殺意MAXお兄ちゃん	82

脳筋と保護者

この世界には魔術が存在する。

魔術は主に戦争などに使われていて、その魔術を使える人間なら剣で一人を殺す間に10人の兵士を殺す事が出来ると言われている。

しかしその魔術師になれる人間は少なく、血筋的な問題、金銭的な問題などが挙げられる。

アルザーノ帝国。

この国は魔術師を多く育てる学院が数多く存在する魔術大国であつた。当然戦争も強く国力で言えば最も強いと言つても過言では無い。

その国の魔術関係の事件を扱う部署。宮廷魔導師団、特務分室に主に二人組で活動をする存在がいる。

帝国軍の人間からは『イノシシと調教師』『アホコンビ』『こいつら突っ込んでおけば大抵なんとかなる』『敵が可愛そう』『作戦ブレイカーと作戦セイバー』『ちくわ大明神』とか言われている。

今日もそんな二人組に狙われる外道魔術師が余りの恐怖に震えながらも自らの研究施設から脱出を図ろうとしていた。外道魔術師の男は自分の研究施設に侵入し暴虐の限りを尽くした無表情の青髪の少女を相手に逃亡の一手を取るしか無かつた。

自分の研究施設でウーツ鋼の大剣を振り回し、研究の成果や器具を

壊されるのはなんとも言いがたいが、あれほど破壊されればもう復旧など不可能。逃げるのが現実的だった。

男が自らの施設の扉を開けると黒髪の青年が立っていた。男は自分の施設の前にいるこの青年は先程の襲撃者の仲間だと判断した。

「くそっ！何者だ！俺の研究所をめちゃくちゃにしやがって！この崇高な研究の理念が分からん訳ではなからう！」

「知らねーよ。全く、国民の命にも手を出してまでやる研究か？何者かという質問にはこう答えよう」

ズハンツ！

男が逃げて来たドアが大剣によって破壊され青髪の少女が追いついて来た。見た目は可憐な少女であるが男が先程見た物を考えれば、もはや恐怖はホラー映画すら上回るものだろう。

「アルザーノ帝国、宮廷魔導師団特務分室」

息のあった名乗りは2人が長い間に一緒に任務をしている事が見て取れる。側から見ればバカップルだが本人達はそのつもりは一切存在しないらしい。

「執行官ナンバー7『戦車』」

「執行官ナンバー8『剛毅』」

名乗りを挙げた2人のコードネームを聞いて男は驚いた。それは魔術師の世界では有名な宮廷魔導師団、最凶の二人組などと呼ばれ最近話題になっている名前だったからだ。

「しかしリエルから逃げ切るとは……割と実力はあったのかな？」

「ん………逃げるのは早かった。きっと前世はウサギか何か」

「随分きたねえウサギだな。多分あれだよ……蚊とか蠅とかだろ」

本人を前にして愉快地会話を始める2人に男は苛立ちながらもどこからか逃走を図れないかと必死に思考を続ける。挟み撃ちにされ

たこの状況ではどちらかを撃破するしか無い。

しかし男の中ではあのイカれた少女に対する恐怖心があるのでどちらを選ぶのかは自ずと確定していた。

「《猛き雷帝よ》！」

男の指先から一節に省略された軍用魔術、『ライトニング・ピアス』一直線に放たれる、鉄さえ貫通する雷光。

通常は三節によって詠唱される呪文ではあるが、男の高い技量によって省略を可能にした事により不意をついた形で青年に魔術を放つことが出来た。

バチツ

しかしあろうことか青年は右手の甲で雷光をはたき落した。人を殺せる威力のある軍用呪文を例え手袋があつたとしても手で触るなど正気の沙汰では無い。しかし青年は特注品の手袋に三属のエネルギーを軽減する魔術、『トライレジスト』を付与している為何の外傷も無かつた。

「ツなー！」

男が驚いたのは青年が魔術を弾いた事では無かつた。青年は攻撃魔術の中でも高い速度を誇る『ライトニング・ピアス』を確実に撃墜したのだ。三節詠唱による攻撃ならまだしも、至近距離から放たれた一節による高速の攻撃をだ。

『ライトニング・ピアス』の一節詠唱。まあその程度飽きるほど見てるし。それじゃあ……………」

男が驚いた隙をこの2人が逃すはずもない。少女は大剣で斬りかかり、青年は逃れられ無いように反対側から拳を叩き込んだ。

結果、男の首は胴体と別れを言うことになった。もう起き上がることはないだろう。

青年はついでと言わんばかりにその死体に魔術を行使する。

「《吠えよ炎獅子》」

青年の手から放たれる灼熱の炎は男の死体を消し炭にした。魔術師の死体を研究する外道魔術師も存在する為死体処理は彼らの仕事では基本であった。

「さて仕事も終わったし飯でも行くかね」

「ん、タルト食べる」

「それは飯じゃないって言っただろ？」

「ん、じゃあ………ケーキ？」

「はあ………わかったよ。ケーキバイキングな」

青年、アルトⅡマツバは少女の発言に頭を抱えながらも結局はケーキを食べる事にしたようだ。そもそもこの青髪の少女、リエルⅡレイフォードには食事以外の娯楽があまり無いのでそれを抑制するのも少し不憫だと思ったからである。

そしてこの2人は4日連続でケーキバイキングに通っていると言う事実も語っておこう。

カリカリカリカリ

リエルはそんな可愛げのある音を立てながら驚異的な速度でタルトを食べていた。どうやらイチゴのタルトがお気に入りらしい。普段無表情なリエルはこの時ばかりは少し嬉しそうな顔をしている。

アルトもリエルを眺めながらショートケーキを何個も食べていた。

あまりの速度に新しくケーキを持ってきた店員も険しい顔をしている。しかしアルトはその店員を見て何かに気がついた様だ。

「……………何やってんすか、アルベルト先輩」

そう。

ケーキを持ってきた男はアルトとリエルと同じ職場。宮廷魔導師団特務分室、執行官ナンバー17『星』のアルベルトⅡフレイザーであったのだ。彼は色々な技能に精通しているので変装などもそつなくこなせるのである。普段の真面目な雰囲気役からチャラ男まで変装や演技の幅は広い。

しかし彼の同僚は彼の変装や演技が完璧な事に異様な違和感を覚えると言う。

カリカリカリカリ

「……………明日緊急で任務が入った。場所はフィジテのアルザーノ帝国魔術学院だ。」

「魔術学院？……………潜入ですか？」

アルトは自分とリエルの年齢を見て魔術学院に通っていてもおかしく無い様な年の為、任務に選出されたと思った。

「違う。アルザーノ帝国魔術学院の魔術競技祭に女王陛下が見学をする予定だ。本来は王室親衛隊などが護衛をする筈なのだが……………その王室親衛隊に不穏な動きがあると情報が入った。」

カリカリカリカリ

「あの王室親衛隊に……………謀反なんてするとは思いませんが……………」

「不穏な動きと言った。何かしらの事情があるのだろう。それに……………アルザーノ帝国魔術学院には産廃王女もいる。」

カリカリカリカリッ！

「関係ない。敵は切る……………それだけ」

「……………」

情報を集める任務の筈なのだが……どうやらリエルにはその所が理解できなかったらしい。アルトの胸中にはふと、人選ミスと言う言葉が浮かんだ。

その日のケーキバイキングの料金はアルト持ちとなった。アルトは一面ではリエルに厳しいがこう言った所で強く出れないのである。リエルは心なしか勝ち誇ったような表情をしている。

「ん、おいしかった。」

「良く飽きもせず毎日食えるな……たまには別の食おうぜ」

「……レーションはいや」

「普通の！飯を食おうって！言ってるの！」

「……………」タルト？」

「うがああああああ！」

アルトの悲惨な悲鳴が住宅街に響き渡った。

近所の人ごめんなさい。

しかしアルトはそんなリエルの事を心配して毎日のように料理を自炊している。ちなみにアルトはリエルが料理中フライパンを曲げた時から料理を教えるのを諦めたらしい。

そして明日からの任務を機にアルトに更なる苦労が降りかかる事は今の段階では誰にもわからない事である。

緊急停止イノシン

そもそもアルトたちにこの任務が回ってきたのはただフィジテの近くの町に居たからに他ならない。王都からは馬車でも相当な時間が掛かるし、学院にある転移用の魔術陣も先日、学院で起こったテロリストの襲撃で壊されてしまったのだ。

その為アルベルトはともかく、全くもって任務に適していないリエルとアルトを派遣するしかなかったのだろう。特務分室の赤髪の貴族が胃を痛めながら命令書を書いているのがアルトの目に浮かんだ。

「これが魔術競技祭ですか……盛り上がってますね。」

「ああ。今回は陛下が見学に来ている。だから例年よりも盛り上がっているのだろう。」

「……………モグモグ」

リエルはアルトの作った朝食のおにぎりを食べながら魔術競技祭の様子を物珍しそうに見ている。リエルにはこういつたイベントに参加した記憶が無い為、多少は興味があるのだろう。

『精神防御』……………中々キツそうな競技もやってますね。」

「……………あそこにいるのがアリシア陛下の娘、エルミアナ王女だろうな」

参加者の屈強な男達の中に一人だけ可憐な少女が佇んでいた、競技も終盤に差し掛かっているのに全く堪えた様子はない。その様子を見てアルトは東方の修行僧の事を思い出した。

「流石はアリシア陛下の娘ですね。上の人間ももつたない事をしましたね。」

「……………事情が事情だ。仕方がない事でもあったのだろう。」

「モグモグ……………あ、グレン」

「は？……………グレン先輩？……………本当だ」

アルトはリエルの視線の先にエルミアナ王女を抱き留めるグレンリーダーの姿を発見した。リエルは無機質な目をしながらグレンに向けて闘志を露わにしている。

「俺達に何も言わずに去って行っただと思っただら……こんな所にいたとはな」

「リエル……ステイだステイ」

「なんで？私はグレンと決着を付けたい」

「余計なこととはするな。任務を忘れたのか？」

アルベルトが今にも動き出しそうなリエルを鋭い眼光で睨んでいる。アルトが制止していなければ今にでも走り出していただろう。

「任務？女王陛下の……グレンと決着を付ける事？」

「……どうしてそこまで覚えていて、その発言が出るんだ？」

「……朝までは覚えてた」

「今覚えてなくてどうすんだ！……ハア」

驚くべき事は朝まで覚えていた事だろう。元同僚であるグレンが見れば驚きのあまり失神してしまうに違いない。そこまでの成長を見せたのはアルトの血の滲むような教育の賜物である。

今回の任務は女王陛下の護衛を務める『王室親衛隊』の監視である。最近、王室親衛隊に不穏な動きがあると情報が入った。原因は異能者差別に対する新しい法案が円卓会で閣議されるようになったからだと思うられている。

異能者とは魔術と同じく、人には出来ないような現象を起こす事ができる人間である、放電したり、水を操ったり、魔術の威力を上げたりと多岐にわたる能力がある。一般的には悪魔の生まれ変わり信じられている。

その異能者に対する法案に関して、『王室親衛隊』が今回の訪問を機に何らかの行動を起こす可能性がある。

と言う事をアルベルトから説明されたのだが、リエルが理解出来

ているか分からない為アルトは確認作業をした。

「何をするかわかったか？」

『王室親衛隊』を……………斬る？』

リエルは途中まで自信ありげだったが途中で目的を見失ったようだ。アルトは頭を抱えた。これだけ騒いでいても周囲には気にされる様な様子はない。アルベルトがこの周辺に認識阻害の結果を張っている為だろう。

「このアホ！斬ってどうすんだ、監視だよ、監視」

「そう、……………でも私はグレンと決着を付けたい」

「……………アルベルト先輩。」

アルトは最早涙目で継るようにアルベルトに泣きついた。しかしアルベルトはリエルがアルトのお陰でかなりの成長をしている事を知っているので何も言う事はない。

「アルベルトとアルトはグレンに会いたくないの？」

「……………知れた事を。あの男には色々と言いたい事がある。」

「……………確かにグレン先輩をボコしたい。」

リエルの同僚の二人は内心グレンにかなりの恨みを持っていた。何故……………何故リエルを置いて行ったのか。今まではグレンとアルト、稀にアルベルトが面倒を見ていたのだが……………グレンが居なくなつてからその負担は一気に二人に降りかかった。どれだけの苦労を二人が感じて居たのかは想像し難い事だろう。

「そう。なら私とアルトでグレンをボコる。アルベルトは色々言いたい事を言えればいい。」

本人はその苦労を全く知らないかのようにグレンにとって死刑宣告に等しいその提案をした。

リエルの技量はここ一年でありえない程に上昇していた。おそらく毎日の様に武術の達人であるアルトと組手をして居た為であろう。そんなリエルをけしかければ流石のグレンをもつて生きて居られるかは分からない。

「俺達はいっくに会わない方がいい」

「……………なぜ？」

「久々、あいつの姿を見てわかった。あいつの居るべき世界は……：……やはり俺達が居るような血に濡れた闇の世界ではなかったらしい。」

アルベルトが目を向けた場所を見るとグレンは銀髪の女の子に土下座をしながら説教をされて居る。先程みたエルミアナ王女はそんな銀髪の子をなだめている。当然、グレンがまだ特務分室に所属していた時よりも楽しそうだ。

「あいつの居るべき場所は、彼処だ。眩い陽の光が当たるあの場所こそ、恐らくグレンという男が真に生きている場所なのだろう。」

その言葉にアルトはグレンが特務分室を出て行った時の件の事を思い出し納得しようとした時。

「女の子の足下が？それはなんとも面妖」

「……………」

あまりに的確な指摘にアルトとアルベルトは押し黙るしか無かった。

その後危惧していた通り王室親衛隊が動いた。アルベルトが監視に放った使い魔達が王室親衛隊の動きを筒抜けにしていたのだ。王室親衛隊は女王陛下を自分達の監視下に置き、エルミアナ王女を抹殺すべく動いている。

そしてその肝心なエルミアナ王女は……………

三人の元同僚グレンと共に王室親衛隊から逃げ回っていた。現在は王室親衛隊を撒き切っているようだ。三人は接触するには今しかないと思いついたのだが……………

「《万象に希う・我が腕に・剛毅なる刃を》」

リイエルがこの機会を逃すはずもない。

リイエルの三節の詠唱によって地面がめくれ上がり、それを基としたウーツ鋼の大剣が錬成される。それをリイエルの細腕はなんら障害もなく握り。グレンに襲いかかった。

「いいいいやあああーッ！」

「リイエル!?! ツちよま、だああッ！」

ほぼ不意打ちにも等しいその一撃をグレンはなんとか避け切って『ウエポンエンチャント』によって自らの腕を強化する。素手であるウーツ鋼の大剣に対抗するのは流石に無理があったのだろう。

「はあああッ」

《刃よ・再び我が腕に・宿り給え》！」

「なッ!?!」

それはリイエルがこの一年間で新しく覚えた技、大剣の再錬成。グレンの腕を避けるように大剣が分解、グレンの腕を抜けた瞬間に再び大剣に戻る。それは余りに凶悪すぎる一撃だった。グレンにはそれに対処出来る手は無い。

「リイエル。……………ツステエエエエエイ！」

ピタッ!

アルトが大声でリイエルに呼び掛けをすると、グレンの顔の前でそんな効果音が聞こえる程の勢いで大剣が止まった。あまりの事にグレンは腰を抜かして倒れ込んだ。

「お久しぶりです。グレン先輩。元気そうですね。」

「ハアハア、……………訳がわかんねえよ。死に掛けたぞ、今。」

「むう……………」

リエルはグレンとの決着を止められて少し不満そうだが、もう決着は付いていた様なものだった。收拾のつかないこの場を納めたのはやはりリアルベルトだった。

「場所を変える。俺について来い。」

被告人グレン＝レーダス

グレン＝レーダスは現在窮地に立たされていた。

自分が辞めた仕事の元同僚にまるで獲物を見るような目で見られながら人目のつかない場所まで連行され命を失いかねない状況に陥っている。

「被告人、グレン＝レーダス。貴方はリエル＝レイフオードの教育係を放置し、そしてその間ニートでいた疑いが掛かっている。………何か弁明は？」

人も殺せそうな眼光で年上であろう男を睨む青年、アルトは怒り狂っていた。仕事を辞めるのはいい、ニートをやっていた事もまあ許せる。

だがリエルの教育を放置した事だけは絶対に許せない。

「……………そ、それより今」ズガアッン！

「ヒイツ!？」

アルトの完全無詠唱による『フィジカルブースト』の掛かった拳がグレンの顔の横を通り過ぎ壁の一部を捻り潰した。幽鬼の如く目でグレンを責め立てる様子を、2人の元同僚はただ見ているだけだった。

「……………まあいいです。グレン先輩にはそれなりの事情と言うも

のもあったのでしようから。俺からこれ以上言う事はありません。許すかどうかは別ですが……………」

「は、はい。助かります。ほんとすいませんでした。」

グレンを見ると本当に反省をしている様だ、恐怖のあまり小動物の様に縮こまってしまっていた。最早アルトによる脅迫がトラウマになっていそうである。アルトもそれを見て必要以上に聞くことを辞めた様だ。

「……………それよりグレン。私と決着を」

「いや、鬼かッ!？」

「……………話を戻すぞ。」

やはりこの收拾のつかない事態を納めたのはアルベルトであった。この様な事が起こる為、グレンが軍にいた時はこの集団で組む事が多かったのである。

「とりあえず今分かっているのは『王室親衛隊』にはその元王女のルミアさんを狙う理由があるって事です。ついでに女王陛下にもあり得ないほど嚴重な監視を配備しています。」

「じゃあ女王陛下の周りは今、どんな感じだ？」

「陛下自身は普通に競技場の貴賓室にいる。陛下を取り囲んでいる王室親衛隊も上位幹部を中核とした先鋭だ。突破は至難の技だな」

難攻不落、例え戦闘行動になったとしても向こう側には奉神戦争を生き抜いた英雄、双紫電のゼーロスがいる。アルト達だけで相手をするのは少しばかり荷が重い。

「……………もういい。考えても仕方ないこともある。」

「お前はもう少し考えろよ……………」

完全に思考を放棄したリエルに主に保護者を務めていた2人が突っ込んだ。アルトは又か…………と呆れ、グレンはこいつも変わってねえなあ感慨深くなっている。

「だから、私は状況を打破する作戦を考えた。」

「……………一応聞いてやるよ」

そう、リエルは思いついたのだ、奴らの包囲網を突破して女王陛下の元にたどり着く為の作戦を。

「まず最初に私が敵に正面から突っ込む。次にアルトが敵に正面から突っ込む。最後にグレンが敵に正面から突っ込む。……………そしてアルベルトが狙撃する。……………どう？」

「……………」

「……………リエルお前……………成長し……………いや待て、待て。流石に脳筋過ぎるだろ。そんなんじや突破なんて……………」

「できる」

「はっ」

その言葉を放ったのはアルトだった。余りにも脳筋過ぎる作戦、リエルも作戦の中にアルベルトの狙撃と言う概念をねじ込む程の成長を見せたが作戦と言うにはお粗末過ぎた。だが……………実行できしてしまう、それが問題だった。

「まず双紫電は俺が抑えます。ほかの先鋭達もグレン先輩の『愚者の世界』があれば魔術を封殺出来ますし、弱体化させた奴も今のリエルなら蹴散らせますし、アルベルト先輩の狙撃での援護もある……………。确实とは言えませんが、成功する確率は高い。」

そう、問題とはリエルの戦闘能力が成長し過ぎた為に、ある程度脳筋な作戦でも成功してしまうと言う点であった。戦力差からリエルが高度な作戦を考えるより、脳筋作戦を実行出来る実力が付く方が早かった。

「さっき見たけど……………今のリエルってそんなに？」

「勝てはしませんけど、あのジジイの『魔闘術』と正面から打ち合えますね……………」

アルトの言うジジイとは宮廷魔導師団、特務分室執行ナンバー9『隠者』のバーナードの事である。四十年前の奉神戦争の時に破壊魔人として恐れられた人間で、双紫電のゼーロスと共に英雄と呼ばれている。

「……………そ、そっすか。そのリエルと決着付けないといけないの？死ぬよ、俺？」

「そう……………グレン、決着付ける気になった？」

「なる訳ねえだろおおおおおッ!?マジで何なの!?俺を殺したいの!?俺との決着に何でそんなに拘るの!？」

「……………魔術師同士の決闘は勝者が敗者に要求を通せる。……………そう聞いた。」

「ああ、そんなカビ臭い伝統があったな！それがどうした!？」

ちなみにこれはアルトがリエルをグレンに嫉ける為に用意した情報だった。

「……………グレンに、どうしても帰ってきて欲しかった……………」

それはこの少女が自分の人生で最も近い人の1人と離れてしまった悲しみから生まれた願いだった。

「……………悪かったよ。いきなり居なくなつて。……………けど俺が死んだら本末転倒だろ？」

「……………確かに、グレン……………鈍った？」

「お前が強くなり過ぎなんだよおおおおお!？」

確かにグレンが鈍ったと言う所もあるだろう。しかしグレンの最も冴えて居た時代のコンディションでも今のリエルを正面から相

手できるかと言うと首を傾げるしかない。

「グレン。俺からも言う事がある。

お前が何も言わずに俺たちの元から去った理由、今は聞かん。帰ってこい、とも言わん。だが……いつか話せ。それがお前の通すべき筋だ。」

それはこの茶番を最後まで聞いていたアルベルトから、元同僚であるグレン、いや相棒とも言える男へ向けた言葉だった。

「……………ああ。」

「ふふっ、……………先生の同僚の方、いい人達なんですね」
「……………」

グレンはルミアのその言葉に恥ずかしさからか曖昧に返すことしかできなかつた。

「脱線させた俺が言うのはどうかと思うんですが……………話を戻しましょう。」

「ああ。」……………ん」

「とりあえずリエルの作戦は最終手段でいいでしょう。そもそも解決する手段を見つけないければいけませんからね。」

「……………女王陛下に面会すれば、この状況の突破口になる筈だ。」

「根拠はなんだ？グレン」

「さあな？ただ、セリカがそうしろって言った。アイツはケチで意地悪だが、意味のない事は絶対に言わない。俺が女王陛下の前に立つ事に何か意味がある筈だ。」

セリカⅡアルフォネア、四百年以上の年を生きた魔女、グレンの育て親に当たる人物だ。過去に神を殺したことさえあると言うこの国において最強の人物である。

「グレン先輩が……………先輩。『玉薬』と『タロット』は？」

「『愚者の世界』はあるが……………まあ十中八九それだろうな」

『愚者の世界』それはグレン＝レーダスの固有魔術、一定範囲内の魔術起動の完全封殺と言う、順当な魔術師相手には無双が可能な性能を有した魔術である。

「あとはどうやって陛下の元に行くかですけど……」
「俺に考えがある」

作戦立案者はグレンだった。

作戦開始

グレンの考えた作戦、それは変装だった。

『セルフィリユージョン』と言う自分の周りの光を操作して変装する魔術によつて、グレンとルミアをアルベルトとリエルに変装させ、アルトとリエルがグレンとルミアに変装する。

アルベルトは両者のサーポートとして両方が見える位置から狙撃での援護を行う。

グレンは現在魔術講師で学院の二組の担任教師である。しかしグレンはその身柄を追われているので向かう事は不可能。ならばそれ以外の人間に変装してクラスに入り込めばいい。グレンからの助っ人とも言えはいい。

陛下の元に到達する事も可能だ、何故ならこの魔術競技祭での優勝クラスは女王陛下と謁見が可能、監督とする人間としていけば警備も抜けられるし、流石に謁見の時は陛下の体裁を保つためにその護衛を薄くしなければならない。

そして肝心の逃走する方の2人は言うまでもない、戦闘は最低限にそれでいて長く逃げればいいのかから。

優勝しなかったら？無論リエルの作戦の出番である。

「いたぞー！逃すな!？」

そしてアルトは現在、リエルを脇に抱えて走っていた。抱え方に関してアルトの主武装とも言える手を空けられる持ち方がこれだけだったからだ。

「止まれッ！止まらなければ、我らが魔導の威力を知る事になるだろうッ！」

しかし止まらない。それどころか警告をした騎士団に向かって走っているではないか。

「警告はしたッ！」

《紅蓮の獅子よ・憤怒のままに・吠え狂え》！」

騎士団による魔術『ブレイズ・バースト』。前方に炎の様な爆風を起こすC級軍用魔術、殺傷性も高く魔術での防護をしていないと致命傷になりうるだろう。

「《我が手に鎧を》」

アルトが唱えた呪文、武器を強化する呪文でもある『ウエポンエンチャント』の改変魔術、『手甲』元の魔術から攻撃性をなくした分、持続力と強度を強化した魔術を腕にかける。

「なッ!？」

そして騎士達による爆風を弾き上げた。

『模倣東方武術 五の型 流転』

アルトの得意技の一つ、東方を武者修行して模倣を重ねた武術。本来は敵の得物や拳を受け流す技だが達人の域に至れば風すら受け流すことが可能な技だ。

しかし流石に爆風『ブレイズバースト』を受け流すのは魔術による防護が必要だが。

アルト曰く、自分が師事した人物なら防護もせずに魔術を受け流していたとの事らしい。

「くそッ! 剣を抜けッ!」

敵の隊長らしき人間が出した命令に従い、向かってくる敵に向かって刀身のない剣を抜いた。

「隊長! 剣が!」

リエルによる超速の錬金術。どんな業物であろうとも錬金術によって刀身を失ってしまえば鈍らにすら劣ってしまう。悔やむべきはリエルが錬金可能な金属で作られていた事だろう。

なす術もない騎士達をアルト達はすり抜けるように通り過ぎた。完全に敵の騎士をおちよくっているように見えるだろう。そしてアルトは敵に向かって振り向き。

「あるえ〜？剣はどうしたんですか？忘れちゃいました？ダメじゃないですかあ〜？ちゃんと持ってなきゃ。」

そう言いながらアルトはインゴットを投げ捨てた。このインゴットの出所がどこであるか、など語るまでも無いだろう。アルトが言うにはグレン先輩の変装だから言動も本人を真似しないと。との事だ。「貴様あ、ツ!？」

そして遂に敵の隊長格の隣の騎士が倒れた。他の騎士達も同じ様に地に倒れ伏している。本人達にとっては原因不明だろう。敵が自分達を通り過ぎた瞬間に何かをしたとも思う筈だ。

まあ実際はアルベルトによる魔術狙撃で気絶しているだけなのだが。顔を真っ赤にしてアルト達に注目していた騎士達がその可能性を考える事が出来なくても仕方がないと言ったところだ。

「ははははははー……………ヤッぱッー！」

アルト達の狙いは時間を稼ぐ事だ。グレンが陛下に謁見をする為でもあるし、別の件の為でもある。アルトとリエルはその別の件をアルベルトに任せている。適材適所といった所だろう。

騎士達を戦闘を続行不可能にならない程度に痛めつけ、増援を呼ばれる様に大袈裟な魔術や技を使う。陛下を守る護衛が少しでもこち

らに回されればグレンの負担が減って御の字だろう。

『二組が優勝だあああああッ!?!』

アルトは会場に響き渡るグレンの作戦が順調に進んでいる事を確認した。向こうにも増援に駆けつけた方がいいか迷っていると、リエルの通信用の魔道具に連絡が入った。

「……………わかった。」

「アルベルト先輩か？」

「ん、悪い奴見つかったって」

アルベルトからの報告、それは今回の任務の一つである帝国内部の内通者の発見である。前々からかなりの機密情報が筒抜けになっていたらしい。当然、特務分室による作戦なども筒抜けだったが三割はリエルによって崩壊していた為、仕事への被害はあまり無かった。アルトはグレンに今回の事件の解決を任せるのを迷った。凡百の魔術師ならグレン先輩が勝つが相手は英雄と呼ばれる人間だ。

「あー、まあグレン先輩なら大丈夫か、多分」

「グレンは鈍ってるけど、負けないと思う。…………多分」

本人は否定しそうだがグレンによる格上殺しは成功率が高い。危機的状況下においてグレンほど能力を発揮できる人間はそうそういないだろう。或いは悪運の強さと言う要因もあるかもしれない。

「じゃあ、さっさとアルベルト先輩と合流しよう」

「…………ん」

集合地点には既にアルベルトが待っていた。待っているアルベルトの雰囲気は険悪だ、余程宜しくない調査結果でも出たのだろう。

「来たか」

「はい、結果の方はどうでした？」

「…………事態は深刻だ。内偵調査の結果、内通者を発見した。目標は

既に離脱を始めている」

「やっぱり居たんですか、内通者。名前は？」

「女王陛下付きの侍女長、エレノアIIシャーレットだ」

「は？」

「……………誰？」

リイエルは覚えて居ないが、帝国の女王陛下に近い立場にいる人間なら一度は見たことがあるはずの人間。侍女長という立場なら帝国の機密情報や作戦情報が漏れていたとしても不思議ではない。

まあ作戦が漏れていたとしてもリイエルが参加すれば作戦など無くなってしまうのだが。

「……………もしかして天の智慧研究会野郎共ですか？」

「……………そうだ。殺しはするな、捕らえて組織の情報を吐かせる」

アルベルトはアルトの憎悪に染まった目を見て、一応宥めた。殺しはしないだろうがアルトの過去は彼らを復讐の対象としていても不思議では無いものだからである。

「……………了解」

「……………アルト、怒ってる？」

「ノーコメント」

「いたぞ。あそこだ」

人の出入りが少ない路地裏、逃走経路としては上出来そうだ。見つかってしまったのはアルベルトの追跡能力の高さからだろう。そもそも彼に狙われて凡百の魔術師が逃げ切れる訳ないのだが。

「あら、見つかってしまいましたか？」

「天の智慧研究会の外道魔術師、エレノアIIシャーレット。はつきりとした出自、あまりにも優れた経歴、卓越した能力……………今思えば、その素性に何一つ傷が無いからこそ怪しいと疑うべきだった」

路地裏に居たのはアルベルトの報告通りの人物、女王陛下付きの侍

女長、エレノア嬢シャーレット。最早内通者である事も隠す気もないのか、普段は見せない様な不気味な気配を漂わせている。

「今回の件の首謀者はあんたか。全くクソ共は訳の分からない事をしやがる」

「お前達は、一体何が目的だ？以前、学院で起きたテロ事件ではエルミア女王を誘拐しようとしたが、今回は殺害しようとした……行動に一貫性がない。お前の組織は一体何を企んでいる？」

「……………『アカシックレコード禁忌教典』」

「またそれか……………」

天の智慧研究会に所属する魔術師が口を揃えて言う言葉、禁忌教典。それが何なのかは頑なに話さないが、天の智慧研究会の奴はこの言葉だけは話す。ロクでもない物であるのは確かだろう。

「そう、我々が目指すは大いなる天空の智慧、そのため王女……とても言っておきましょうかしら？」

「生死は問わない……………」

「もちろん生きていらつしやる方が良いのですが、急進派とでも言いましょうか……組織の中にはせっかちな方も居ますので、ふふっ」

エレノアは笑いながらも多少は情報を漏らした。いや態とである事は確実だ、知られても良い情報若しくは、知られた方が都合の良い情報だったのだろう。

「アルベルト先輩……………なんかコイツ今のうちに殺した方が良い気がしますよ」

「待て、殺すな。捕らえて組織の情報を吐かせるべきだ」

「……………どちらにせよ、斬る」

学院へ

アルトⅡマツバの朝は早い。

彼の朝は自作した目覚まし用の魔術によって始まる。彼の魔術の専門は人体に関する白魔術、それも自身の肉体に魔術をかける事に適性がある。寝ている時に長時間詠唱を待機させ、一定時間後に発動させる。高等技術の無駄遣いに帝国の士官が見れば卒倒しそうな光景である。

「ふわあ〜……………飯作るか」

アルトは東方で武者修行をしていた事がある為、朝食は米になる事が多い。米を炊くのは自分の分、そして自分の同僚の分だ。アルトがこの仕事を始めてから少しした頃に知り合った…………いや、拾った少女の事である。

「♪~~~~」

彼に家族は居ない。正確には居たと言うのが正しいが、既に死んでしまっている。それが原因で彼の心にはある問題を抱えているが今は話す必要も無いだろう。

ガチャ

「リエルー！起きろー、朝だぞー」

部屋の扉を開けると彼の同僚の青髪の少女が眠そうにしていた。ありがちなラブコメ展開では少女に追い出されそうだが、この少女、リエルⅡレイフォードにはそんな乙女のような思考は存在しない。

「……………ん、おきた」

「おはよう。ほら、こっち来い」

アルトはリエルを目の前に座らせ、その荒れまくった髪を櫛で梳く。リエルの髪は質はいいが寝癖が酷い。しかしその髪質から真面目に手入れをすればそれ相応の物になるだろう。生憎本人は興味が無い様だが。

アルトも毎日やっている訳ではない。例えば勲章の授与式、陛下への謁見。潜入任務の時など必要な時にしかやらない。

まあ、任務の内容からこれから毎日やらなければいけないのだが。

「今回の任務は長期の護衛だ」

「……ん」

「対象はルミアールティンジェル。グレンのクラスの生徒だ」

グレンの名前を出すとリエルは少し反応した。髪を弄られているので余り動く事は無かったが自分を拾った人間のうちの一人、グレンには思うところがあるのだろう。

「……決着を」「ついでに宜しい」

「……う？なんで」

髪を弄るのも終わった為、大幅に首を傾げたりリエル。表情筋は動いていないがこう言う感情表現は多彩になっている。

「護衛をする為に、グレンのクラスに編入するからだ。平日は毎日の様に会えるぞ」

「わかった」

アルトはリエルの世話をしながら手元の資料に目を通す。あの学院の情報である。食堂があり、弁当を作る必要が無いのは事前に確認済みだった。確認すべきは学院の構造や生徒、教授についての情報だ。不審人物を特定したり、逃走経路を確保したりするには必須である。

「いいか？自己紹介では軍属である事を話すなよ？」

「……ん」

「あとグレンに斬りかかるのもダメだ」

「ん」

「ハンカチ持ったか？」

「ん？………ん」

「クラスの奴らとは仲良くしろよ？」

「ん」

「後は………」

「アルト」

「何だ？」

「覚えた」

「……………ならよし」

フエジテの中心部から少し離れた所にある割と上等な住宅街。貴族などの屋敷が並ぶ場所の中にある借家。アルトが新しく住もうと借りた場所だ。護衛対象のルミアⅡティンジェルが住んでいるフイーベル家も近く護衛には丁度良い物件だ。

アルザーノ魔術学院の制服に着替えた二人は家を出てその通学路を確認する。無論その道筋は護衛対象と同じになる様になっている為、最近ルミアの護衛を自主的に始めた人物に会う事は必然だった。

「おはようグレン……先輩？先生か」

「おお！アルトか。お前が来てくれるのは頼もしいな。頼むぞ」

「まっ、その前に一発」

アルトによる割と全力の拳がグレンを掠めた。

アルトは完全に当てる気だったのだが、この至近距離で回避されたのはグレンの格闘術に対する非凡な才能の為だろうか。

「あぶねッ!?今完全に当たったら首が逝ってたコースだよ!」

「やだなー、軽い挨拶ですよ」

「挨拶!?お前そんな非常識な事やらないだろ！完全に嘘だよな!」

「ん、私もグレンに挨拶する」

「やめて!」

「あのく、その子は？競技祭の時の……」

すると護衛対象であるルミアの友人システイナーⅡフイーベルはリエルの事を少し覚えていたのかグレンに質問した。

「ああ、白猫はリエルの顔ぐらいしか知らないよな。こいつらは俺

の宮廷魔導師団時代の同僚だ。」

「アルト＝マツバです。よろしく」

「ん、リエル＝レイフオード」

アルトとリエルは二人に軽く挨拶をした。仮にも美少女である事からアルトの二人に対する印象は上々である。顔には出ていないが、リエルは護衛対象に興味がある様だ。

「改めて自己紹介しますね。私はルミア＝ティンジェルです。で、この子が私の友達のシステイーナ。宮廷魔導師団の方達が来てくれるなんてとても心強いです。これからよろしくお願いしますね？」

「ああ。よろしく」「ん、任せて」

グレンは前々から疑問だった事を聞く事にした。何故、何故よりもよってこの二人なのか。確かにリエルはアルトがいれば多少は暴走しないとはいえ、護衛任務に向いてるとはお世辞にも言えなかった。

「そもそも、何でお前らなんだ？言っちゃ悪いが……………」

「あー、ほんとはクリストフとかが適任なんでしょうけど……………人手不足ですかね。それで突撃任務以外で暇を持て余している俺達が護衛を」

アルトは自分が配置された理由を意図的に曖昧にして伝えた。そもそもアルトが送られたのはルミア＝ティンジェルの護衛として送られたのもあるが、別の任務の為という面が強い。

「安心して……………斬るのと壊すのは得意」

「いや、安心できないから。マジで」

「…………？」

リエルは自信満々に言い放ったが、言っていることは確実に狂戦士のそれである。帝国軍の最終兵器とか呼ばれている二人を護衛任務に回すのはお門違いもいい所だ。グレンもドン引きである。

「まあ、マジレスするとグレン先輩と共同で護衛をするなら俺らが妥当な所ですね」

「お前ら俺を酷使する気満々かよ……………」

「魔術師相手ならグレン先輩、切り札的な存在ですし」

グレンの『愚者の世界』と言う固有魔術は対魔術師戦において最大の切り札と言ってもいい。そしてアルトとリエルはその『愚者の世界』による影響が少ない。

迂闊にこの布陣に飛び込めば、魔術も発動出来ない状態で殴られ、蹴られ、殴られ、斬られ、斬られ、殴られて完全に再起不能コースに送られる事は確実である。

「まあ、グレン先輩は鈍ってますから……勘を戻して貰わないと」
「……………それってやつぱり？」

グレンは確かに凡百の魔術師よりは強いが、天の智慧研究会の先鋭や幹部陣を相手取るには少し足りないと思っっている。

「俺かりィエルと模擬戦ですね。」

「やめて！ボク死んじやう!？」

「グレンなら大丈夫。……………多分」

「マジで何なの！お前らの俺に対する異常な期待は!？」

「グレン先輩の生命力はG並ですから。割と死なない事は周知の事実ですよ」

「……………それ、褒め言葉？」

茶番はともかく、学院へ向かったアルト達。

グレンが毎日のように美少女二人を連れて登校している事への嫉妬の視線や、見知らぬ生徒がいる事への好奇の視線に晒されながら歩いている。

「あつ、ティンジェルさんとフィーベルさん。俺がない時はリエルの事頼みますね。甘い物で釣れば大体何とかなるから」

アルトは思い出したかのように特大の地雷を落とした。このイノシシを止める役目をか弱い少女に託すのは正気の沙汰では無いが、そもそも止める人間がいなければどんな事が起こるのか予想も出来ないだろう。

「……………？大丈夫、私に斬れない物はない。」

「……………」

「ほんと、いつもこんな感じなんで。流石に斬りかかる事は無い……………筈、です。……………多分」

アルトは話しながら自分の言っている事に不安を持ち始めた。しかしこんな事を頼めるのはこちらの事情を知っているこの二人だけなのだ。

「いいわよ。……ね、ルミア。」

「うん。任せて」

「あなたが神か………リィエル、二人の言う事は聞いておけよ？」

「ん、二人ともよろしく」

事故紹介（誤字に非ず）

今朝方、見知らぬ生徒がグレンと共に登校してきた事から、もう新しい編入生、若しくは転入生がこの学校に来る事が噂となっていた。

「はい！今日はお前らの予想通り、編入生が来る。それもこのクラスに二人だ。なんだウエンデイ？」

「二人ともこのクラスに来るのですか？」

「あー、なんだ。二人とも俺の知り合いなんだよ、だから俺に任せるんだと」

確かに、編入生が二人同じクラスに振り分けられるのはおかしい。アルトはこの質問を予想していたので、グレンに対応するように助言していた。

「後の質問は編入生にしてくれ。入ってこい。」

グレンに促され教室に入ったアルトとリエル。

リエルは丁寧に入れされた海のように青い髪を靡かせ、無表情な顔さえ気にならない程の美少女だ。その小柄な体格からは平時の力強い戦闘なんて一切想像出来ない。

「か、可憐だ……」

「守つてあげたくなるタイプの……」

一方アルトは黒髪的美男子である。リエルより少し大きいぐらいの体格で、同じ年の男子と比べて少し小さいぐらいだ。しかしその体格からでもどこか力強さを感じる。

アルトはリエルに反応した男子を要注意人物として目を付けた。色恋などの感情では無く、リエルの教育に悪そうぐらいにしか思っていないが。

「じゃあ自己紹介を頼む。」

「ん、リエルⅡレイフォード。出身は不明、好きなものは甘いもの得意なのは錬金術。趣味は……」

リエルは自分の趣味を言おうとしたが特に趣味と言えることが無かった。そこで助けを求めるとしてアルトを見るが。

「何故そこで俺を見るんだ？……」

アルトはリイエルが自発的に自己紹介をして欲しいと思っているのであまり助言をしようとは思っていなかった。

「むう……………」

「……………、甘い物を食う事とでも言っとけ」

リイエルは上目遣いを覚えた。

一体何処の誰が教えたのかは分からないがアルトへの効果は抜群だった。教えられるのは特務分室の女性だろう。そうなると上司の赤髪女か、もしかすると元同僚でグレンにゾッコンだった方かもしれない。

「ん、その手があった。」

「はあ……………全く。あー、俺はアルトⅡマツバ。一時期東方に住んでいた事があるね。趣味は格闘と料理。得意なのは白魔術だ」

「よし、じゃあ二人に何か質問ある？」

これも転入生や編入生の定番と言える。答えられる範囲なら何かを質問する。今のアルト達の会話を見て何が気になったのかは聞くまでも無いだろう。

「じゃあ俺が、二人はどんな関係なんだ？」

「……………難しいな、俺は家族だと思ってるよ」

「ん、それが妥当」

「……………」

熟年夫婦。二人を表すならこの言葉が一番近いだろうか、恋人同士より進んでいるのに何故か冷めた関係に見えてしまう様なものだ。互いの距離が近すぎて恋愛感情が生まれない。

リイエルはその感情を持ってるのが怪しいが。

「えーと、グレン先生とは何処で知り合っただんですか？」

「ん、拾われた」

「え？」

その質問にはリイエルが真っ先に答えた。特に理由は無かったのだろう。ただ自分が覚えている事だから口に出たのかもしれない。ほぼ反射的なものだろう。

「グレンとアルトに拾われた。だから私がいると思ってる。」

「あー、なんだ孤兒的な奴だよ。それを俺とアルトで見つけたんだ。」
グレンの苦し紛れのフォローに生徒達も信賴している先生の言葉である事から一応納得した様だ。

「す、好きな異性のタイプとかは？」

「ノーコメント」

「？私はアルトが好き」

「ん？」

リエルによる衝撃発言はこのクラスに一瞬の沈黙を齎した。余りにもあつさりと答えた事でその場の全員が理解するのに数秒は掛かったのだろう。一番最初に復帰したアルトも混乱していた。

「「何いイイイイ！」」

「きやああああ！大胆〜！」

「イケメンな事さえ許せねえのに、すでに編入生も……………体育館裏を借りなきやいけねえなあ！」

「ちよつと待て！リエル、この質問は恋愛対象について聞いてるわけ……………よく考えて答えてくれ頼むから」

「？よくわからない。アルトが好きじゃダメなの？」

アルトは弁明したが理解はできなかつた様だ。当然であろう、リエルに教育しているアルトが教えていないのだから。リエルは教えた事を実践するのでアルトが意図的に後回しにしていたのだ。

今回はそれが仇になったと見える。

「……………あー、リエルは恋愛に興味が無いっぽいので、あくまで家族として！家族として！好きなんだよな。うん。」

「……………ん、そうかも」

「なら、いいの？」

「いや待て、そのまま発展しないとは限らない。早めに芽を摘むべきじゃあ。」

アルトの起死回生？の一手によって周囲の反応は一応収まった様だ。肝心な部分を弁明できたかは首を傾げざるしかないが。

こんな事もあり教室内では二人は無自覚バカップルという認識に収まった。

その後アルトは適当に授業をこなしながら昼食の時間になった。そして案の定リエルは授業で大暴走したのでクラスの人が話しかけづらい状況になっている。

「むう、潜入って難しい」

「いやいやいや、普通にリエルがムキになって暴れただけだろう、流石にアレを投げるのはアカンよ」

「ん、気をつける」

「じゃありエル。女友達を作ってこい。今朝の二人でいいから飯にでも誘え。俺は別で食うから」

「……………わかった」

アルトはリエルの友人関係を広げさせる為に護衛対象を利用する事にしたらしい。別にアルトがやってもいいのだが、編入生がやるより元からいる人間に頼る方が効率的だと考えたのだろう。

リエルを見送り、自分も昼食に行く友人でも探そうかと周囲を見渡す。……………だが今朝の事故紹介のせいだろうか、敵意の籠った視線を感じる。

「グレン先……………生。飯いきましようよ」

「おま、リエルは？どうした。一人にして大丈夫なのか？」

どうやらグレンは先程授業で壊した機材の件で絞られたらしい。

完全にとぼつちりとも言えなくもない。アルトは静かに同情して飯を奢ることにした。

「少し友達でも作らせようかな?と。敵がいらないなら問題は起こしませんよ」

「さつき問題になったんですが……………」

「それは偶然、若しくは事故ですね、お詫びに飯を奢りますよ」

「おお!マジかよ助かるわ」

そう言つてグレンは意気揚々と学生達の列に並んだ。リエルが大量のタルトを机に持つていく所を見たが、アルトは幻覚を見た事にしたらしい。

「A定食とB定食を大盛りとこのサラダを頼む」

「遠慮が無いですね、まあいいですが。俺はC定食の大盛りで」

「しつかし、お前が来てくれて助かるわ。流星にリエルが成長したつて言つても潜入は難しそうだからな」

「そうですね。止まる事は覚えさせたんですが、その他の事はね……………まあこの護衛任務で覚えてくれるといいなあ」

アルトはリエルの成長を願っているがそこまで過度な期待はしていなかった。精々少し友好的になってくれればなあと思つている。それだけでも帝国軍でやつていくには十分だろう。

「あ、そういえば俺、白猫に魔術戦の駆け引きを教える過程で拳闘をやつてるんだが、手伝つてくれないか?」

「白猫?ああ、フィーベルさんですか。帝国式じゃなくて大丈夫ですか?」

「ああ。想定外の技を使つてくる敵を対応させる訓練になるだろ?」

アルトが使うのは帝国式格闘術ではなく、東方で培った全ての流派のいいところ取りとも言える複合格闘術だ。同じ様な事が出来る人間もいない。

「成る程、じゃあその時にでもグレン先輩を鍛え直しますか」

「……………え」

「リエルも最近暴れ足りなそうですし、良いかもしれませんね」

「ちよ、マジ?おれ俺を殺す気か?」

「大丈夫ですよ。最初は俺がグレン先輩に合わせます」
「なら、いいのか？」

しかしグレンは翌日地獄を見る事となる。

あくまで、最初は、合わせるのの後にならぬかは語るまでもない。

悪夢（尚グレンのみ）

「《万象に希う・我が腕手に・十字の剣を》」

明け方、フィジテの高級住宅街の空き地に対峙する青年と少女。少女の手には今し方、錬成された鋼の大剣が握られている。

一方青年は完全に無手だ、しかしその目には闘志を宿らせ、敗北なんて微塵もするつもりは無い。

「ッ！いいいいいやあああッ！」

二人の人間が息を飲んで見守る中、最初に動いたのはリィエル^{少女}だった。大地を削る様な踏み込みと共に青年に斬りかかる。その速度は並みの魔術師では対応出来ないだろう。

「よつと」

アルト^{青年}はその一撃に真っ向から向かい合うつもりは無い。あのアホみたいな力で振られる剣を素手で対応するのは得策ではない。例え迎撃出来たとしても、再錬成されるのがリィエルの怖い所であろう。

「ッ！」

「《鎧よ》」

リィエルの振り下ろしから、止まる事のない連撃が始まった。技術も技も無い、ただ力のまま脅威的な速度で振るわれる大剣を前にして、青年も魔術の使用を強いられる。

ギヤリッ

魔術によって防護を作った腕で大剣を踊る様に受け流す。しかしリィエルは、ほぼ毎日こうやって対処されている。それ故に対応も出来上がっていた。

「《我が腕手に、ッ！」

リィエルは剣を振り上げながら魔術の詠唱を開始した。その振り上げも容易く避けられるが、リィエルの目的は当てる事では無い。

リィエルは剣から手を離した。

「ッ!?!」

「十字の懐剣を》」

そして空いた手によるボディブローを叩き込みながら詠唱を終えて、空いた手に短剣を錬成した。ボディブローは防がれたが短剣を防御する手はアルトには無い。

「脚は空いてんだよー!」

そこからのアルトの反応は早かった。リエルに脚を掛けて重心を崩させ転がし、距離を取らせ……

「《功》 ツ!」

『ウエポンエンチャント』の改変魔術、効果時間を一瞬に、威力だけを求めて改変された魔術式。完全に玄人向けの魔術である事は言うまでも無い。

忘れた頃の上から降って来た大剣を殴って壊す。

それだけの攻防を繰り返しても二人の闘志は揺るがない。勝利を得る為に次なる策を巡らせ様としたその時、

「いや、

お前ら怖すぎるんですけどおおおおッ!」

そしてグレンの心からの叫びが二人の模擬戦を中断させた。

「そうですか?」

「ん、いつも通り」

「いつも通り!?こんなのを毎日やってんの!?バカなの?アホなの?死ぬの?」

グレンの言うことも最もだ。こんな激しい模擬戦を毎日の様に繰り返す人間は帝国軍、いやこの国には存在しないだろう。何より驚くべき事は魔術師だと言うのに騎士よりも数倍は激しい近接戦をしている事だ。

「でも、グレン先輩にはこの中に入って三つ巴の戦闘をして貰うつもりなんですが……」

「殺す気か!いや死ぬぞ?!絶対死ぬぞ!」

「またまた。全盛期のグレン先輩なら1分はいけますよ。」

無論フル装備での話だが。グレンは隠者の教えを受けているので非常に引き出しが多い。拳銃、飛針、鎖、拳闘、魔術の封殺、そして必殺の魔術が二つ。

最後の二つに限っては当たれば絶対殺せる様な性能がある。

「1分しか生きられ無いじゃないか……」

「俺達からすれば1分もなんですけどね」

「つたく……白猫、こいつらの真似はするんじゃないぞ。魔術師として絶対異常だからなこいつら……」

「大丈夫。グレンも相当ゲテモノ」

「私、ここにいるのが不安になって来たわ……」

誰一人として、真つ当な魔術師がいない。これでどうやって魔術戦を教えると言うのか。だが安心してほしい、この集団は特務分室の中でも特に魔術師していない奴ら筆頭である。他はちゃんと魔術師している。

「まあ、魔術戦を学ぶより戦闘センスを磨くのが先ですね。それならこのゲテモノ集団が最も上手く教えられるすし」

「そうだな、リエルはともかく。俺は拳闘を、アルトは東方の武術を教えられる」

「むう……」

リエルはむくれているが、本人は何も考えず類稀なる戦闘センスに全てを委ねて戦っているのである。完全に感覚に身を任せている為に、何かを教えるのに向かないのはリエルも理解していたので何も言えなかった。

「俺も白魔術のスペシャリストを名乗ってますから怪我の心配も必要ないですし。とりあえずグレン先輩は……」

「ま、待ってくれ！猶予が欲しい。俺には無理だ！」

「大人しくリエルによって三途の川を渡りましょう」

アルトによる死刑宣告が通達され、待つてましたとばかりに執行者リエルがグレンににじり寄る。

「ヒイツ！やめて！許してください！いやああああああ！」

グレンの悲鳴が響いているが安心して欲しい。

既に騒音を遮断する結界を張っているので近所迷惑にはならない。
ちなみにグレンには安心する要素は無かった。

ザワザワ

「……………あー、これからお前らが行く『遠征学修』のガイドランスを始めます……………グフツ……………」

「……………おい、グレン先生なんか様子がおかしくね？」

「ああ、いつにも増して何かを削られている様な……………」

「それだけダラけているのに、あのシステイナーでさえ何も言わないなんて、一体何が？」

グレンは今朝の事で全ての気力を使い果たしてしまった、模擬戦ではあるが今までで一番生命の危機を感じたかもしれない。グレンはそんな事を考えながら自らの体に鞭を打って授業を始めた。

「このクラスが行くのは、あー『白金魔導研究所』か」

「えー、別の場所が良かったぜ。な？アルト」

「んー、俺はどこでもいいんだけど……………」

アルトは魔術の研究にそこまで興味はない。魔術を使うのだからって便利だからと言う理由だし、既に固有魔術オリジナルも完成しているので魔術に関する研鑽の必要性を感じていなかった。

「フツ……………甘いぞお前ら」

「うわっ、急に元気になったよこの人」

「シヤラップ！お前からこの『白金魔導研究所』がどこにあるのか知ってるか？」

「……………確かサイネリア島ですね」

「サイネリア島……………リゾート地として有名なツ！」

サイネリア島は霊脈の関係で水が綺麗でありリゾート地としてもかなり有名である。『白金魔導研究所』がこの場所にあるのも、この地の綺麗な水を実験に使用する為だと言う。

「そうだ、自由時間も多めに取ってある……………そしてこのクラスの女子は総じてレベルが高い。何が言いたいのかわかるよな？」

「先生…あんたに一生ついて行くぜ！」

グレンが男子生徒達と交流を深めているが、女子生徒達はその様子を見て冷ややかな視線を送っていた。

「ん、海に行くの楽しみ」

「そう言えばリエルはまだ行った事なかったか」

「アンタ達も偶には息抜きすればいいんじゃない？」

「そうですね……………最低限の護衛以外は先輩に丸投げしようかな」

リエルが楽しみにしている旅行先でさえ仕事に追われるのはあまり良くないだろうとアルトは考えた。最近では外道魔術師の襲撃はリエルとアルトをメインに対応しているのでリエルも疲れているだろう。

「ていうかりエル水着持ってたっけ？」

「ん、イヴに貰ったのがある」

「イヴさんが……………なら大丈夫か」

アルトはあの真面目上司が何故リエルに水着を渡したのか疑問に思いながら、あの人が渡したならまともだから安全だと考えた。

その判断を後々後悔することになるが。

水着回ではない（スク水はある）

アルザーノ帝国魔術学院、その近郊。

人の寄り付かない裏路地に二人の男がいた。一人はアルトⅡマツバ、学院で護衛任務をしている帝国軍の暗部の一人だ。

「特に情報は無いですね。向こうも使い捨ての手駒を送りつけてるみたいですし」

「そうだな。奴らは情報の制限を徹底している。襲撃自体も組織の末端の処分だと思ってるのだろう」

もう一人はアルトの同僚である帝国軍特務分室に所属している魔術狙撃の名人。コードネーム《星》のアルベルトⅡフレイザーである。

二人が話し合っているのはリエルとアルトが学院に潜入してから、天の智慧研究会の襲撃が多くなつた事についてで、どうやら組織は我慢の効かない不穏分子をこちらに送り込んで処分させているらしい。

「面倒な奴らですね、流石は天の智慧研究会共だ」

「……………情報を吐かせるまで殺すなよ」

「それでも公私混同はそこまでしないタイプですよ」

「公私混同している所が問題なんだがな……………まあいい。それはお前に任せよう」

アルベルトの言う公私混同とは言わずもがなりリエルの事なのだが、アルベルト本人もそこまで問題視していないらしい。何かあってもアルトがどうにかすると思ってるのだろう。

「まあ、何かあったら家族としてケジメはつけるんで……………」

「フン、少なくともあの男よりは安心できるな」

アルベルトはそう言つて去つて行つた。

その背中を見るアルトは何処か悟つた顔をしていた。

「遺書でも書くかなあ……………」

「ふう、ただいま〜」

アルトは現在住んでいるアパートに戻ってきた。アパートと言ってもかなり高級な部類に入るが、あまり金を使わないアルトとリエルは給料が有り余っているので特に問題はない。

「ん、おかえりアルト。……これ、どう？」

「……………」

帰宅したアルトを出迎えたのはスクール水着に身を包んだリエルだった。アルトはあまりの衝撃に言葉を失った。同居人がスク水で出迎えてくればこんな反応になっても仕方ないのかもしれない。ご丁寧に名札の所にリエルと名前まで付いている。

「……………それ、なんて言っただけなんだ？」

「？イヴは私なら似合うって言ってた」

「……………クソアマめ」

真相は《隠者》のバーナードの策略によりリエルへと回って来ただけなのだが……………アルトはそれを知らないので自然に上司にヘイトが向かった様だ。

「……………似合わないの？」

リエルの往来の体型もあって、アルトは不覚にも似合っていると思ってしまう程だ。しかしそれを公衆の面前に出すのは非常に宜しくない。

「ツ……………似合っては、いる。が別のを探した方がいいぞ」

「なんで？アルトはこれ嫌い？」

リエルはかつての同僚に教わった上目遣いを駆使してアルトに詰め寄る。アルトは理性が削られそうな状況の中、正しい答えを見つけてしようと躍起になっている。

「あー、あれだよ。……………倫理的によろしくない、です。」

「……………そう」

ら。まだ優しい方ですよ」

「お前らは不死身か何かなのか!？」

実際アルトが帝国軍に入る前、東方で武者修行していた頃はかなりの回数、自作の蘇生魔術のお世話になったのだ。教わった人間？が悪かったのもあるが、アルトの中では東方は修羅の国だと言う認識だ。

そして一行は馬車にて1日を過ごしてから、船に乗って目的のサイネリア島へと到着した。

「おー、観光地と言うだけあって景色が良いですね」

「……ああ……うぷっ」

「先生、しつかり……」

グレンは船旅で完全に酔っていた。馬車は大丈夫だった様だが船は苦手らしい。アルトもここまで酷いと鍛錬も出来ないと思ったのかグレンに施しを与える様だ。

「はあ……《その身に調律を》《意識よ・均衡を保て》」

アルトによる基本の白魔術『ライフアップ』と『マインドアップ』を改変する事で、グレンの自律神経を正常に戻し、崩れた平衡感覚を正常に戻した。

「お……ありがとな。割と良くなったわ」

「今のは?」

グレンの船酔いが治ったのを見て白魔術が得意なルミアも知らない魔術に興味を持った様だ。当然だろう、船酔いを治す魔術なんて存在しないのだから。

「あー、魔術における裏技の一つですね。本来の効果を制限して浮いた分のリソースを目的効果に使うんですよ。今回で言うところのライフアップを自律神経にマインドアップは平衡感覚を強化させました」

「へー、そんな事も出来るんだ」

「まあ、でかい怪我ならそれ相応の魔術を使わないといけないんですがね。軽い症状だったらマインドアップかライフアップで割とどう

にかなったりするんですよ」

「ふう、アルトはそこらの法医師師より腕が良いからな。色々参考にするといいぞ」

グレンが言うようにアルトは白魔術が得意で、魔術特性もそれ向きである。武者修行時代から無駄に怪我也多く自分で治す機会も多かったものでそれ相応の技量が身に付いたのだ。

今では粉砕骨折した腕をおよそ10分で完璧に直せるのだと言う。

「おいアルトー！早く行こうぜ！」

「あいよー！じゃありエル任務は頼んだぞ。」

「ん、任せて」

クラスメイト達が旅館の部屋に移動し始めたのでアルトは護衛対象と一旦別れることになった。例え別れたとしても大抵の襲撃はリィエルがなんとかしてくれるだろう。

グレンも旅館の手続きなどがある為その場を離れる事となった。

アルトと男子生徒達の仲は良好だ。最初こそリィエルの爆弾発言のせいで嫉妬、怨念のこもった目で見られていたが、一定の時間を過ごしているとアルトの立場が最早、保護者である事がありありと理解できる。

「おおっ！このベッド滅茶苦茶柔らかええ!」

グレンの担当するクラス二組の生徒、カツシユがベッドで転がりながらその感触を楽しんでいる。

「つたく……うるさいやつだな、君は。はしやがないでくれよ」

「あんまり暴れると怒られるよ、カツシユ」

それに呆れた視線を送るギィヴルと苦笑いを浮かべるセシル。

「グレン先……生って怒るっけ?」

アルトはグレン先生という言葉に違和感を感じながらも、根本的な疑問を持った。

「さあ?逆ギレは良くしてるな。それよりこれから予定はなんだったけ」

「確か……今日、明日は日程が空いてそれから遠征学修じやなかったか？」

「四日目から研究所見学で、五日目が終日講義。六日目は自由行動で七日目にはフィジテに帰還だ。」

アルトが思い出したと言った感じで口に出し、それにギイヴルが補足する様に説明を加えた。

「明日は自由かー、釣り具の準備でもしとこ」

「何を釣るんだ？」

「さあ？でも霊脈とかの関係で結構いい魚はいそうだな」

そう言いながらアルトは釣り具の整備を始めた。

裏切りの親バカ

帝国魔術学院のグレンが担任を務める二組がサイネリアの旅館に到着したその日の夜中。

闇夜に紛れ、目的地へと到達せんと突き進む男達の姿があった。

「それでは……作戦を開始する！」

二組の男子の中心、カツシユの立案した。

『第一次女子の部屋進行作戦』

その作戦は学生が考案したとは思えないほど巧妙で、誰にも見つからず、作戦を遂行できる事が約束出来るレベルの物だった。

「俺……リィエルちゃんと徹夜で双六するんだ……」

「な!? ずるいぞ俺も混ぜろ！」

「俺はルミアちゃんとトランプで遊ぶぞッ！」

「ウエンディ様に『この無礼者!』って罵倒されたい……」

「システイーナは……別にいいや。多分説教うっさいし」

「「うんうん」」

男達は己の欲望を思い思いに口にした。その欲望が叶うのもあと少しの所まで来ている。誰も邪魔する者など存在しない。

そう、思っていた。

「ば、馬鹿な!? 何故貴方がここに……グレン先生!？」

男達の前に現れたのは、担任のグレン＝リーダーダス。この学院の秩序……いや自らの給料を守る為に男達の前に立ちはだかったのだ。

「お前ら……甘い。甘すぎるぞ! お前ら程度の浅知恵なぞ俺にはお見通しだ。見つかったからには……部屋に戻れ」

グレンの目は優しい。自分にも同じ様な時期があった。そんな理由からその状況を懐かしんでいるのかもしれない。

「……断るー俺は『理想郷』に辿り着くんだけ！」

カツシユは覚悟を決めた男の顔をしていた。何があってもここを

突き進む……そんな不転の意思を感じさせる強い光を目に灯している。

「お前ら……」

グレンはカツシユの強い瞳にその『覚悟』を感じ取った。そして理解できた。諦めさせる事など既に不可能だと言う事を。

「……仕方あるまい。お前らは可笑しいとは思わなかったか？お前らの作戦は完璧だった。ルートも手引きの後回しでさえ完璧だった。なのに俺が目の前にいる……どうしてだか、わかるか？」

グレンはまるで子供に諭す様に、優しい声で言い放った。そしてその言葉を聞いてカツシユは気づいてしまった。ありえない……そんな事あるはずがない……男なら、そんな事出来る筈がない。

「まさか……内通者……？」

「そうだ。……お前らの中にどうしてコイツ来たんだ？と思う様な奴はいなかったか？」

ザワザワ

男達は隣の人間、周りの人間を疑った。まさかお前が、そんな疑いの目で互いを見る。先程までの統率など見る影もない。

「待て……これは精神攻撃だ！動揺させるのが先生の目的だ！」

カツシユは仲間達を落ち着かせようと周囲に声をかける。内通者なんて最初からいないのだ。同志達の意味なんて曲げる事は不可能なん——

ズドン！

「……は？」

カツシユの背後からとつもない音がした。まるで何かを減り込ませたかの様な……日常生活では全く聞かない類の音が鳴り響いた。

「残念だったな……リエルの保護者であるアルトが来た時点で引き返していれば、犠牲者は出なかった筈なのに……」

グレンの言葉を聞く前にカツシユは衝撃の光景を目にした。さつきまで元気に夢を語っていたクラスメイトが一人……：……頭大神家から地面に埋しまっていたたのだ。

「全く愚かだ……：……リイエルの元に行きたいなら……」

カツシユの前に出てきた青年の顔色は伺えない。ただ声色から非常に不愉快だと言う事が伝わってきた。

青年の足音が妙に響き渡り、クラスメイト達の恐怖を掻き立てる。

「俺より強くなってからにしやがれ」

青年の名はアルトⅡマツバ。リイエルⅡレイフオードの保護者的……：……いや、過保護な保護者だった。

「アルト……：……まさかお前最初からツ!?」

「当たり前だろ? リイエルもお前らも、もう寝る時間だぜ? 全員意識を飛ばして明日まで起きれない様にしてやるよ」

アルトは準備運動は終わった、と言わんばかりに腕を回す。

だが、クラスメイト達はアルトの実力を把握していなかった。だからこそ……：……まだ逆転のチャンスがある、そう思ってしまった。

「クソツ! 相手はたかが二人だ! いくらグレン先生でも大人数で相手をすればツ!」

「お前ら……：……俺が助っ人にアルトを選んだ時点で気づけよ。そいつは……：……」

まずは弱い方から、そんな考えから一人の生徒がアルトに飛びかかった。

「……：……甘い!」

アルトは飛び掛かって来た生徒の手を掴み、そのまま背負う様に流れる様な動作で生徒を投げ、地面に叩きつけた。

東方の武術の一つ、背負い投げ……：……アルザーノ帝国でも名の知れた技だった。

「……：……俺より強いぞ」

投げられた生徒は泡を吹いて気絶していた。

「ヒエッ……」

男達は思わず後ずさる。あいつの、アルトの攻撃には容赦というものが感じられない。当たり前どころが悪かったら確実に死んでしまう様な威力を躊躇いも無く……

アルトの達人的な技量のお陰で致命傷には至っていないが捕まれば確実に意識を落とされる。そんな現実が学生である男達に突きつけられた。

「全員床に寝かしてやる（物理）。早く寝たい奴から前に出ろ」

「……………ッ！……………お前ら、散開しろ！」

このままでは全員奴に殺られる……………ッ。カツシユはもう全員で理想郷に辿り着く事が不可能である事を感じ苦肉の策を出した。

「カツシユ……………お前……………」

男達は自らのリーダーが出した結論を理解した。同じ志を目指す者だからこそ理解できる。

「一人でも多く理想郷に到達するんだ……………！そしてツ後の世代に伝えるんだ……………理想郷は存在するんだって！」

「「おう!!」」

男達の決意は固まった。例えば目の前にいる悪魔アルトに阻まれたとしても、絶対に理想郷に辿り着く。もう男達には迷いや恐れは無くなっていた。

「これ以上俺の給料を減らされる訳にはいかない！お前らを必ず止めて見せる……………アルト、やるぞ」

「誰一人としてリエルの元に行かせる訳にはいきませんね」

その後、理想郷に辿り着けた者がいるかは皆さんのご想像にお任せしよう。

「……………なにあれ」

その日女子の部屋からは木の上に干される数多の男子生徒の姿が
確認できたと言う。

真 水着回『副題：狂気のビーチバレー』

朝

太陽がある程度昇り、空色の海と白い砂浜を照らしている。流石にリゾート地と言うだけあって、このサイネリアの砂浜の景色は美しく、夏のシーズン前であっても、ある程度人の姿が見える。

「……………あ”あ”」

「……………クツソ、アルトお前許さねーぞ」

「自業自得って言葉、知ってる？」

砂浜を水着を着て動く死体の如き、弱々しく活力の見られない歩き方で歩く男子生徒達と、その前で男子生徒達の怨念を向けられる水着の上からパーカーを着た青年、アルトが集合場所に向けて歩いた。

「まったく……………お前らが魔術なんか使ったせいで、アルトの自重が消えたんだぞ。最後には軽く《魔闘術》まで……………」

「やだなあ……………軽い脅しですよ、当たってないからセーフ、セーフ」

「みんな、おはよう！どうかしたの？」

そんな集団に話しかけてきたのは。学校で大天使と呼ばれるルミア―ティンゼルだった。

「おお……………理想郷はここにあったのか……………」

「天使が舞い降りたのか……………」

男子と同様に水着を着用していて、男子達はその恵まれた肢体を目にした事で一瞬にして活力が戻ったようだ。

ルミアはアルト達の護衛対象である為、当然同じ仕事をしているリリエルも近くに居る筈だ。

「お、リリエル。おはよう」

「ん、おはようアルト」

リリエルの水着は空色のフリルの付いたセパレートの水着を身に纏っていて、リリエルの青い髪色と陶器の様な白い肌によく合って清楚な雰囲気を感じさせる。

「おー、似合ってるじゃん。選んでもらったのか？」

「ん！自分で選んだ」

アルトはリエルの印象とよく合った水着をリエルの友達の人を選んだのだと思っただが、実際はリエルが選んだ物だったらしい。いつも通りの無表情な顔だが、長年一緒にいるアルトからすればドヤ顔をしている事がよく分かった。

「？……まだ髪が跳ねてるじゃん。梳かしてやるよ」

「ん、おねがい」

アルトはリエルが髪を梳かしていない事に気付いた。そもそもリエルが自分で髪の手入れをする事は無いのだが。

また友人の二人が手入れをしようとしたがリエルはアルト以外に髪を弄られるのは嫌いらしくそのままの状態だった。

「偶には自分でやってくれよな……」

「嫌……アルトにやってもらう」

髪を梳かされるリエルは気持ちよさそうに目を細めている。アルトもその表情を見て文句を言うのをやめた様だ。

「うわあ……なんだあいつら」

「アルトめ……自分だけいい思いを……」

「あはは……どっちかって言うのであれば違うんじゃないかなあ……」

ルミアの言う通り側から見ればあの様子は年の近い兄妹か、若しくは母親と娘を連想させる。アルトの手際は手馴れていて、リエルのボサボサだった髪も瞬く間に慣らされている。

「リエルが髪を梳かすのを断ったのも分かるわね……手際が一流の美容師並みじゃない……」

「私も……やってもらおうかしら……？」

結局今の二人の邪魔をするのも無駄かと思つた女子生徒は頼む事は無かつた。

「アルト、死ねッ！」

カツシユの恵まれた体格から放たれる強烈なスパイクが暴言と共にアルトに向かう。

「おっと、あぶない！リエル。上げろ」

「んー！」

アルトはそれを物ともせず完璧なタイミングでレシーブに成功、同時にペアのリエルにボールを上げるように指示を出した。リエルも最初から分かっていた様でアルトの前のネットに軽くトスを上げた。

「《破ア》！」

アルトの無駄に高度な詠唱改変による『ウエポンエンチャント』と無詠唱による『フィジカルブースト』によるスパイクがカツシユに向けてお返しとばかりに放たれる。

「えっええええええ!?グハッ……………」

カツシユは避ける事も返す事も出来ず、その殺人的な威力を誇つたバレーボールが顔面に直撃してしまった。あまりの衝撃に周囲の間もボールが直撃したカツシユを二度見した程だ。

「安心しろ……………峰打ちだ」

「か、カツシユー!?」

魔術学院の生徒達が熱心に取り組んでいるのはビーチバレーであつた。しかし只のビーチバレーではない魔術を使う事を許可され

たビーチバレーである。当然殺傷性の高い魔術は使っていけないし、相手に直接干渉するのも禁止である。

まあそれでも武術の達人であるアルトが魔術による強化を入れてスパイクを放てば殺人的な威力になる事は必然だ。ただアルトが峰打ちと言うからにはおそらく生きているのだろう。たぶん……………

「えーと……………カツシユ君が昏倒したのでアルト、リエル組の勝ちです」

「ん！やった！」

「え……………勝ちでいいんだ」

審判のルミアによる采配にアルトは疑問を持ったが気にしない事にした。現在勝ち抜きルールでやっているが昨日の恨みからアルトのペアに向かつてくる男子達がひしめき合っていた。

このままでも十分見ている方にも娯楽にはなるが別の人にもやらせた方がいいと思つてカルミアは次のペアを指名した。

「次は……………アルト、リエルペア対先生とシステイペアをお願いします」

「俺ええええええ!!」

「嘘でしょ……………?」

当然、グレン達にとっては死刑宣告に等しい采配だった。

「……………絶対勝つ！」

「リエルがやる気なら……………まあ成長結果の確認には丁度いいですね」

この試合の結果は一目瞭然であった。

例えばグレンが元軍人であり強いフィジカルを持っていたとしても、現肉体派軍人のアルトとリエルと比べれば下位互換に過ぎない。

システイーナも魔術に関して非凡な才能を持っているとはいえま

だ成長段階であり、既に戦術の確立された二人に勝つ事は難しい。

「……やあつー！」

ズゴム！

「くっ！取れねえ。つーか砂にめり込むとかどんな力で打ってんだあいつは……」

リエルもアルトのスパイクと同じく、殺人的な威力を出している。何処から見てもまともに取る事は出来ない。

なんとかしなくては一矢報いる事すら不可能だ。

グレンの中に明確な作戦も浮かばないままアルトのサーブが放たれる。アルトのサーブもまた狂った威力がある。グレンの顔面に一直線にボールが向かっていく。

「《大なる風よ》！」

「ツ！白猫……これなら！」

アルトのサーブはシステイーナの『ゲイルブロウ』によって威力が減衰され、グレンもなんとかレシーブする事が出来た。

「先生、お願い！《その剣に光あれ》」

グレンのレシーブによって浮いた球をシステイーナがトスを上げ、同時にグレンの腕に『ウエポンエンチャント』の魔術を行使する。ここが好機と見たグレンが飛び上がる。

「ッ、うおおおおおおお！オラア！」

ズパンツ

グレンのスパイクはアルト達のコートの上の白線に落ちた。アルトやリエルもこのスパイクは不意打ちとなり拾う事が出来なかった。

「やりますね……先輩！」

「ん！楽しくなって来た！」

この後もめちやくちやバレーした。

そうだと情操教育しよう

アルザーノ魔術学院の生徒たちが海岸で自由に時間を過ごした日の夜。学生たちが泊まる旅館から出てくる生徒達がいた。

本格的に夜も更け街の明かりと輝く星のみが辺りを照らしている。

「ねえ、やっぱり辞めとかない?」

「すぐに戻れば大丈夫だよ。ね、リエル?」

「ん、敵は全てぶった斬る」

この女子生徒三人、システイーナ、ルミア、リエルはリゾート地であるサイネリアの夜景や星空を見る為に宿泊している旅館を抜け出していた。

アルトがいれば流石に護衛対象が迂闊に外に出るのを避けさせるのだろうが、生憎学生として潜入している為男女別である時は指摘する事も出来ない。

「ふふ、ちゃんと夜景が綺麗なところを調べてきたんだよ」

「……ハア。わかったわよ。偶にはこういうのもいいかもね」

システイーナも有名な夜景というのが気になったのかももう戻ろうとする気は無いらしい。

日中遊び回った海岸を歩く三人は岩礁で見知った人物を見つける事になった。

その人物はこんな夜中に灯りもつけずに持参した椅子に座り込んで海に釣り糸を垂らして海岸線を眺めている。

「アルト?」

「ん?………え?」

アルトは護衛対象や同僚との遭遇に混乱した。門限なんてとうに過ぎていと言うのにどうして外にいるのか?自分の事は棚に上げて旅館に帰らせるか思考するが。

「………まあいいや、早めに戻るんだぞ」

「ん、アルトも気をつけて」

「………それだけでいいの?」

あまりに簡単に外出を許した事にシステイーナは驚くが、こんなり

ゾート地の何処に人が居るのかも分からない所での襲撃は無い筈だとアルトは思っている。それに……

「お前らを帰したら俺も抜け出した事がバレちゃうし……魚もまだ一匹も釣れてないからこのまま帰ると負けた気分になる」

そもそも今は夜なので魚も睡眠に入っていて、この付近には夜行性の魚が生息していないと言う事は誰が指摘するのか。

当然、女子三人は釣りについて詳しくもなく、この辺に生息している魚に詳しいわけでも無いので指摘は出来なかった。

「アルト君って意外に負けず嫌いなのかな？」

別れた後、アルトが食い入る様に見つめている事からそれだけ魚を釣りたいという強固な意志を見て取れた。

「ん、アルトは負けるのが嫌いみたい。前バーナードに負けた時も凄く悔しがってた」

「バーナード？アルトってすごい強いのに……」

システイナはバーナードという名前に聞き覚えがあつたが、リエルの口から出た言葉なのでリエルの同僚の人間であるのだろうと当たりをつけた。

まさか暴走少女であるリエルから出た名前が四十年前の英雄の名前であるとは思ひ至らなかつたらしい。

「そのあとアルトが山籠りして一週間行方不明になって、帰ってきてからバーナードをボコしてた」

リエルはその時のアルトが余りにも精神的な何かを削っているだろうという狂気に囚われた顔をしていた為によく覚えていた。

「うわあ……… それって、かなり度が過ぎた負けず嫌いなんじゃない？」

三人は知らないがアルトは別れた後、少ししてから余りにも魚が釣れないので復讐とばかりに海に潜って手掴みで魚を乱獲した様だ。

そして目的地に到着した三人はその場に座り込んで他愛ない会話をし始めた。ルミアとシステイーナの二人は年頃の少女であるのでリエルからアルトの話を聞き出そうとしている。

「へくやっぱりお兄さんみたいな感じなんだ、アルト君は」

「ん、でも最近そこまで一緒にいる事が無くなった………なんでかはわからないけど」

リエルは少し前のグレンの様に自分の前からアルトが消えてしまうのでは無いかと不安になっていた。根拠は無いし、原因もわからないので対処する方法も無いのでどうする事も出来ないが。

「うーん、親離れして欲しい……とかかな？」

ルミアにはあの過保護なアルトがリエルから離れる理由などそれしか思い至らなかった。無論そういう面で距離を置いているという理由もあるが、何か別の要因があるとリエルは思っている。

「……じゃあアルトと何処かに出掛けたりとかするの？」

答えが出ない質問が続けても意味がない、システイーナは新しく興味のある事を聞いてみた。

システイーナ自身が秘密裏に書いている小説のネタにするつもりである為、頭の中で淡々とメモを取る準備をしている。

「んく、仕事が終わった後はスイーツバイキングを奢ってくれる。後は………こういう景色がいい場所に連れて行ってくれる事もある」

リエルは海の景色と星空を見ながら呟いた。

「ふーん、デート……なのかなあ」

「でも景色のいい場所か、アルトは結構ロマンチストみたいね」

「ロマンチスト？よくわからないけど、アルトは月を見るのが好きみたい」

「!？」

「どうしたの？システイ」

システイーナはアルトが月が好きなのではなく有名な文学的言い

回して言外に好意を伝えているのでは？と下世話な想像をするが真実は……誰にもわからない。

翌日

一行は白金魔術研究所に見学に来ていた。

アルトやリエルが専門とする白魔術や錬金術を複合した学問で、生命の神秘やその深淵に迫るかなりマッドな部分もある。

無論学生に見学させるぐらいなのでそんなに真つ黒な研究をしている筈が無いというのがグレンの予想である。

所長であるバークスさんの案内も終わり、各々が自分の見学したい場所を見て回っていた。

「白金術……か」

「やっぱり白魔術が得意だと興味がある事が多いの？」

遠い目をしながら周囲を見渡しているアルトを見つけたシスティーナはそんな事を言いながら話しかけた。

「いいや。俺がするのは所謂戦場の医術。こういう生命の神秘とかを追求する事はしない……というよりしたくないかな？」

「ふーん、よくわかんないわね。誰だって神秘的な物は気になると思うんだけど……」

将来『メルガリウスの城』という謎の建造物の正体を掴みたいと思っているシスティーナからすれば余り心当たりが無い感情なのだろう。

「別にわからなくてもいいよ。でも気になったからってやり過ぎると俺達みたいな奴に消されかねないから折り合いはつけようね」

「……………わかったわ」

苦笑しながらもアルトが放った言葉には様々な感情が込められていた。外道魔術師への怒りや憎しみ、少しだけの間でも友人となった人物を手にかけてく無いという思いが混ざり微妙な表情をしている。

そして極少数だけが知っている事だがリエルと言う存在が産ま

れたのもこの白金術の深淵……一般的に外法と言われる存在の恩恵である事もアルトが顔を顰める原因であろう。

「おいアルトー！こっちに面白そうな物があるぜー！」

「わかった！今いくよー！……じゃあまた、フィーベルさん」

先程まで意味深な表情をしていたアルトを見ながらシステイーナはあの過保護な保護者は一体どれだけ濃い人生を送っているのかと心配になった。

親離れ

ほんの2年と少し前。

件の組織から亡命したいと願った兄妹がいた。

当時任務についていたのは、俺とグレン先輩とアルベルト先輩で、俺はその任務にそこまでやる気は無かった。

まさか両親を殺した組織から亡命するのを助ける事があるとは………任務最初期は酷かっただろう。彼らに対して敵意すら持っていた気がする。自分の中では復讐は完結していた為に、流石に手を下すという事は無かった。

それでも自分はその言葉に好意的になってしまった。

『もし………よかったら、家族にならない？』

自分にとって家族という言葉は失った最も大切な物で、他の物では到底埋め合わせする事なんて出来なかった。だから自分は家族という言葉に乗せられたのか………いや、これはただの言い訳だな。

彼らは善良とは言えずとも気のいい人間で少なくとも心の何処かで気に入っていたのだろう。

『あなたが迷惑じゃ無ければ………あの子のこと、お願いね』
「……………」

昨晚と同様に釣り糸を垂らすアルトは来訪者の気配を察知した。

アルベルトの忠告通りリエルが自分に牙を剥くと言う事実になからずショックを受けるが、こんな事も最初から想定のうちであつ

た。

想定していた通り寝返った組織も例の『天の智慧研究会』であろう。そもそもリエルの出自はその組織が関わっているが故に、他の可能性は考えづらい。

「……………アルベルト先輩の言った通りになったか。全く……………怖いなあの方は」

「……………」

リエルは口を開かなかった。これから殺す相手に対して交わす言葉なんて必要ないのか……………または別の要因か。そんな考察もこれから意味をなさなくなるのだが。

アルトは自らの手袋を外してリエルの足元に投げた。

「魔術師同士の決闘で勝者は相手に言う事を聞かせる事が出来る。当然知ってるだろ？俺が教えたから……………な」

「……………わかった」

目を見開いたリエルが手袋を拾い上げる……………それが決闘を承諾する方法故に。

「俺が勝ったらリエルはいつも通り俺たちの仲間。リエルが勝つたら……………敵でも家族の元でもどこにでも行くといい」

「……………ん、《剣よ》」

「ふう……………《拳よ》」

互いのことをほぼ知り尽くした二人はこの決闘に緊張感を持つ事が無かった。互いの間合い、呼吸の間隔、攻撃のリズム……………全て覚えてる。

いつもはアルトが勝利するが今日に限ってはそうではない。互いに譲れない物がある。奥の手を晒す事になろうとも全力で勝ちに行く。

「……………ッ！」

「……………ッ！」

ここに特務分室のエース同士の対局が始まった。

真夜中の海岸線で鈍い音を響かせながら戦う二人。どちらも互いの手を知っている為に決め手を切ることが出来ない。

この二人は同じ近接戦専門の魔術師として対極に位置していた。天才的な戦闘感による極限の速さを誇る剣線を繰り出すリエル。驚異的な経験、リエルには無い技を使い反撃の目を狙うアルト。

肉体のスペックに限って言えば魔術によって作られた肉体を持つリエルが優っている。それでもアルトがその速度についていけるのはリエルの数倍の戦闘経験を持ったアルトの先読みの恩恵であろう。

「ツぐ……………」

しかしどんなに上手く受け流してもリエルの振り回す大剣のダメージを消す事は出来ない。アルトの肉体の耐久、体力はリエルと比べて加速度的に削られる一方だ。

戦闘時間が長引く程アルトには不都合な事が増え、リエルに負ける可能性は高くなる。

そもそもこの戦闘はアルトにとっては異常な程不利な対局であったのだろう。

アルトはリエルを無力化、敗北させる事を目的としているがリエルはアルトを殺す事を目的とし。リエルは高い記憶力によってアルトの技を覚えているが、リエルの剣はそもそも戦闘勘によって繰り出される変幻自在の剣、アルトにとっては全てが初見。

故にアルトの出せる答えは一つ、リエルの知らない技…………所謂奥の手を使わざるを得ない。

アルトはリィエルの連撃に耐えきれず体制を崩す。リィエルがそれを見逃す筈も無い。

「やああああッ！」

リィエルの渾身の一撃がアルトの残像を捉え、当然の如く大剣は空を切る。

「ッ……………かかったな！」

最初に隙を見せたのはリィエルだった。アルトが東方にて忍者に習った忍術……………空蟬。リィエルは残像を残す程の緩急によって敵の目測を誤らせる技に完全に掛かってしまった。

「『いっぺん寝とけええええッ』」

そして隙を晒したリィエルに『フィジカルブースト』で加速、背後から拳を叩き込もうと接近……………そしてアルトの目が捉えたのはリィエルによつて新しく錬成された剣。

しかしアルトを切り捨てるには遅すぎる。そう判断した故にアルトは躊躇わず踏み込み。

「ッ!？」

リィエルの罠に掛かった。

アルトによつて錬金術の理を叩き込まれたリィエルは自身の剣の錬成、正式名称『隠す爪』の術式改変が可能になった。

アルトからすればその改変は剣の形状を変化させる程度だと認識しているがリィエルが直感によつて導き出した利用法は完全にアルトを想定とした改変だった。

錬成素材の座標指定。

今までいたずらに地面を削り作り出していたのだが、素材をアルトの踏み込む場所に指定する事で簡易的な落とし穴を作り出した。

「ツぐう……………」

拳はリィエルに届いた。

しかし足場が崩れた事によつて威力は減衰、致命傷になり得なかつ

た。そして当然アルトは無防備、万策が尽きた。

アルトの胸を大剣が貫く。

「……………」

「……………アルト、今まで……………」

アルトが最後に見たのは涙を流すリエルだった。

—————

海岸にて決着がついた時、丁度良いタイミングでグレンがそこに来てきた。やってきた理由は只の下世話な老婆心でアルトの元に行ったリエルを追ってきただけなのだが。

まさか殺し合いをしているとは夢にも思わなかっただろう。

「……………リエルお前……………」

グレンもアルベルトから裏切りの忠告はされていた。しかし完全にアルトによって制御されているリエルに問題など見つかる訳もなく信じていなかったのだろう。

「……………グレン」

リエルはアルトから血に濡れた大剣を引き抜き正面に構えた。当然リエルからすればグレンは敵だ。しかしグレンの始末は命令されていない。

「なんでアルトを……………」

グレンから見てアルトの生存は絶望的だ。例え白魔術の達人といえど意識がなければ魔術など発動できないし、アルトの出血は多く相当嚴重な治療をしなければ助けられない。

「命令………された。一番大切な人を殺せって」

「………ッ誰だよ。お前に命令した奴ってのは！」

リエルに命令出来る人間なんてそれこそ上司であるイヴかアルトぐらいしか思いつかない。となると………精神操作系統の術を仕込まれていたか。

「………兄さん」

「………そういう訳かよ。殴ってでも止めるべきなんだろうな………」

グレンは事情を理解した。リエルの出自を考えれば想像がつく、本来は止めるべきではあるが、グレンはリエルに勝つ事が出来ない。それが純然たる事実であった。

「………じゃあね」

去り際にグレンの側頭部に一撃を入れ意識を落とす。

アルトの技術を形だけでも模倣しているので手加減も容易かった。

海岸に残されたのは倒れ臥す二人の男とアルトの釣り具だけだった。

番外編 クリスマスマシジョン

本格的に冬が始まり寒くなってきたこの季節。
年末前のこの時期にはあるイベントがあった。

このイベントの為にアルトとリエルは何故か上司に有給を取らされたので家でくつろいでいるのだが…………

「アルト……………クリスマスって何？」

リエルは自分と同じくこたつの中でくつろいでいる家族の少年に疑問に思ったことを聞いた。

「クリスマス……………まあ元は偉い人の誕生日だったっけな。今はただの祭りってイメージが強いよ」

「んー、どんな祭り？」

アルトはリエルに聞かれた事を頭の中で思い返してみる。以前の自分はクリスマスに鳥を獲って来て丸焼きにし、家族みんなで食べた事を思い出した。

「ローストチキンを食べたり、子供にプレゼントを渡したり……………後はその年いい子にすればサンタクロースって奴が夜中忍び込んで枕元にプレゼントを置いてくんだよなあ」

昔、一晩中張り込んでサンタクロースを襲撃……………そこから父との本気の魔術戦になって母に怒られた事はいい思い出である。

「夜中に忍び込む……………」

「どうかしたか？」

リエルはアルトの言葉を聞いて考え込んだ。何を考えたかと言うならば子は親に似ると言えばよく分かるだろう。

「私にもサンタ……………来るかな……………」

「ツ……………リエルはいい子だから。きっと来るさ」

「んー待ってる」

リエルは特殊な出自で、親はいない。きっとクリスマスと言う行事も体験した事が無いのだろう。そんな事を思った一人の親バカは当然今日やる事を思い付いた。

「ところでリエル。欲しいものある？」

「……………いちぢ(タルト?)」

「食品かよ」

「ん?」

「いや、いいんだ。来るといいなサンタクローズ」

アルトは近所のケーキ屋に用事が出来た。

後は例の格好も用意しなければならぬ。夕食の準備という名目で少し出かけるとしよう。

その夜自分の家に忍び込むという謎の状況に違和感を覚えながら何故かバーナードが所持していた例の赤い礼装を受け取り作戦を実行に移す。

この礼装、温度調整や壁への張り付きなど便利な効果が付いていて無駄に高性能である。煙突から入って落ちても大丈夫な様に耐衝撃のルーンまで……………

何故ここまで高性能なのか。それはバーナードのサンタクローズとしての対象が余りに高度過ぎたからであった。バーナードには孫や子はおらず独り身だが面倒を見ていた子供がいた……………若き日のイヴもイグナイトであるのだが。

彼女の家はクリスマスを祝うほど真つ当な家とは言えずイヴの元には当然のようにサンタクローズは来なかった。この事を不憫に思ったバーナードは名門であるイグナイト家の人間に気付かれずプレゼントを置きに行く必要があった。

イグナイト家に気付かれず侵入する事なんて普通は不可能なのだ。がそこは英雄。自身のスペックと作り出したこの礼装でなんとかしてしまっただろう。

イヴもサンタクローズという年でもないのでバーナードはこの礼

装の扱いに困っていたのだ。そこで丁度娘？が出来たアルトの手に渡ったのだろう。

先ずは一キロ離れた所から遠視の魔術で対象の状態を確認する。窓から見た部屋にいたのは帝国魔導師団の礼装に身を包み大剣を出し待機しているリイエルだった。

「あいつ……サンタクローズを殺す気か？」

何故いちごのタルトを枕元に置くのに命を賭けなければならないのか？この理不尽にアルトは親という生物の偉大さを感じた。

しかし諦める訳にはいかない。

昔取った杵柄、アルトは隠形の類いも得意であった。教えてくれた忍者の師もこんな平和的な使い方なら眉をひそめる事もないだろう。

夜の街の屋根を赤い人間が跳ね回る。

素早く、それでいて音もなく、着実に気配を殺し対象に近づく。しかしどんなに隠形に優れていてもあんな風に見張られていたら見つかる事は必然である。

何か手を考えなくては……そしてアルトはポケットの中からバーナードに託された謎の薬物を取り出した。あの英雄が言うには「吸った瞬間ゾウでも爆睡。翌日にスッキリ目覚められる」らしい。

一体何に使ったのだと聞いた時は、疲れた顔をしながら「イヴちゃんサンタ捕まえる為に『イーラの炎』や『第七園』使ってくるから……」と嘆いていた。

サンタとはどれだけ隠形を極めなければならないのか。さらなる疑問が深まる。

しかし作戦は決まった。

事前に準備していた屋根裏に繋がる隠し扉を使いリイエルの部屋の上に潜む。リイエルは今も剣を構えたまま動かない。

「メリークリスマス」

アルトはそんな言葉と共にバーナード作の薬品をリエルの部屋に散布……恐ろしい事に無臭で煙も出ないらしい。これではリエルも抵抗出来ないだろう。

リエルは流石に耐えられなかったのかその場で意識を失い倒れそうになるが

「おっと……」

アルトが慌てて部屋に侵入し、リエルの体を支えた。

未だに薬品は残っているが無駄に高性能なサンタ礼装のつけ髭にはガスマスクと同様の効果がある。特に問題はなかった。

リエルを布団に寝かせて毛布を被せた後、上流階級の人間が食べる高級ケーキ屋で買ってきたいちごタルトを枕元に置いた。寝相が悪い訳でも無いのでベッドから落ちる事は無いだろう。

「う……アルト……」

「?寝言か……」

アルトはリエル頭を愛おしそうに撫でた後部屋を後にした。

翌朝

「……サンタ……悔れない……」

「どうした?」

翌朝リエルはサンタクロースに謎の対抗心を燃やしていた。

「サンタはきつと凄腕の暗殺者……戦ったら殺されていたのは私の方……」

「どうやらサンタクロースの幻想?は守ることが出来たらしい。また別のところで勘違いが起こっている気もするが……」

「そもそもサンタは待ち構えるものじゃ無いから。何を貰ったんだ」

「んーいちごのタルト。とっても美味しそう」

アルトはリエルの嬉しそうな顔を見て自分もプレゼントを用意していたのを思い出した。昨日買い物中に見つけた物だ。

「メリークリスマス。これプレゼント」

「いちごのタルト？」

「まだ欲しいのか？まあタルトじゃないよ」

アルトが渡したのはいちごを催したネックレスだ。アルト自身もいちごのショートケーキが好きだったりするのでプレゼントには丁度良かった。

「俺とお揃い。食べ物の方が良かった？」

「嬉しい……大切にする」

リエルがネックレスを大事そうに抱え込んだ。

アルトもそれを見ていちごのタルトを買わなくて良かったと心底思った。

「アルト」

「？」

「メリークリスマス」

「ああ、メリークリスマス」

そして当然のごとく今日の二人の朝食はいちごタルトだった。

姉妹の対話

アルトがリエルによって倒されてから数刻、リエルはよく見知ったケーキ屋の前に居た。兄を名乗る男からのお願いでアルトを殺し、そして友人であるルミアを攫った事を思い詰め辺りを歩いてきた筈だ。

「……………」

そもそもこのケーキ屋は王都の近くの先程の場所から相当離れた場所にある筈。あの研究所の近辺は森と海である為に似た様な店にたどり着いたという事もあり得ない。

日中であるのに辺りに人影一つ存在しない状況に訝しみながらもリエルはそのケーキ屋の中に入らなければならぬ、そう感じた。無論あんな事をしてしまった後であるので何かを食べる気は無かった。

このケーキ屋はアルトとリエルがここ数年良く通っていたケーキ屋で、一定の料金を払えば食べ放題と言う画期的な商法で人気である。昼時ともなれば多くの人で賑わっている筈である。

しかし中に入っても誰も居ない。

ケーキは置いてあるが店員すら存在しなかった。

「……………甘いもの好きなんだ？」

「ツ！誰！」

背後から掛けられた声に反応してリエルは瞬時に距離を取って振り向いた。いつでも無詠唱で剣を錬成出来るように構え相手の顔を伺うと――

「!?……………私？」

リエルが見たのは燃える様に赤い髪色の自分と全く同じ顔をした女だった。その事を不気味に思ったリエルは即座に大剣を錬成しようと魔術を発動しようとするが、

「ッなんで……………」

一向に魔術が発動する気配すらしなかった。それを見ていた赤髪の女性が口を開いた。

「此処では魔術を使えないわよ」

「……………貴方は誰？」

リエルの質問に赤い髪の女は少し悩む仕草をして決心した様に自分の名を語ろうとした。

「私の名前は■■■■——うーんこれはダメか。取り敢えず貴方の姉だからお姉ちゃんって呼んで？」

リエル何故か名前を聞き取れなかった。そして女はそれを予想していたかの様に自分を姉と呼べと言った。

しかしリエル自身、先程まで兄を自称している人間に命令されて

リエルはそれ以上考えたくは無かった。わかるのは兄を名乗る男のせいで身内と自称されたとしても不愉快な気持ちになる事だけだ。

「……………」

「やっぱり呼んではくれないのね……………それも仕方ない事ね。所であなただの名前は？」

「……………リエル」

「……………そう。少しお話ししない？」

赤髪の女はリエルの名前を聞くと少し悲しそうな表情を見せた、しかしそれをリエルに悟られない様に明るく近くにあったテーブルの椅子を引いた。

「……………ん」

返事とは言えない様な反応だったがリエルが椅子に座つたのを見て、肯定と受け取った様だ。赤い髪の女はいつの間にか持っていたいちごタルトが大量に乗った皿を机に置き一口口にした。

「……………美味しいわね」

「ん、当たり前」

二人で見つけた店である為に、作つたわけでも無いのにリエルは

少し誇らしく思った。

「なんでも聞いていいよ。答えられる事なら答えるわ」

赤髪の女性は少し微笑ましそうにしながら本題に入った。

「……………ここは何処？」

「うーん。夢の中……………かな？リエルの心の中でもあるよ」

「心の……………中」

リエルは自分の少ししか無い記憶を掘り返す。

確かにこの店はよく来るし自分の楽しみにしている事の一つであるので納得できる部分もあった。

「そう、心の中。だから式があっても魔術は成立しないわ。代わりにこんな事は出来るけどね」

赤髪の女はテーブルの上に紅茶の入ったティーカップを作り出した。魔術を唱えた様子も無い。想像すれば物が入るのだろうとリエルは納得した。

「……………私は……………私はどうしてあの男の命令に逆らえないの？」

この赤髪の女性が知っている。

その理由を……………名前も知らない人間である筈なのに。だがリエルの勘がそう言っている。

「あの男には貴方に対する命令権限があるの……………他にも二人は命令できる人間がいたわ」

「……………う？」

「そうね……………精神操作の魔術に掛かっていると思えばいいわ」

「……………わかった」

つまり自分はその男の命令に逆らうのは難しいという事だろう。しかしそれはアルトを手にかけて事への免罪符にはならない。理由がどうであれリエルは大切な人を殺してしまったのだから……………リエルは自分の無力さが嫌になった。

そして…………聞かなければならない事がある…………気がする。根本的な疑問で最も知るべき事だと勘が訴えかける。

「……………あなたは、『何』？」

彼女は…………人では無い。

その仕草、表情、声、思考はどれを取っても人間である。疑いようもなくそう思えはするが…………人では無いと何故か知っていた。

「……………私は貴方の姉よ。既に死んでしまっただけだね……………他の見方をするなら私は……………」

女は自分がここに存在できる事情、どう言った経緯でリエルが生まれたのか…………様々な事をリエルに話した。リエルは多少驚きはしたものの落ち着いて聞いている。

「……………」

「これで伝えなきゃいけない事は伝えたわ。さようならリエル」

「……………さようなら……………お姉ちゃん」

イルシアは最後にリエルが姉と呼んだことに驚きはしたものの思い残す事はもう無い様でリエルの心の中から消える様に存在が薄れていった。

「……………あ、アルト君にはよろしくいってね」

「……………？」

ふっかつのじゅもん

最初に目を覚ましたのはグレンだった。

グレンは弾けた様に起き上がり自分が殴られる直前に起こった事を思い出した。リエルの手によってアルトが殺された。

「ッ……………クソ！」

グレンは自身の警戒の無さを嘆いた。リエルに精神的な問題は無かった。それは確かである。だがもつと根本的な所でリエルに問題があつたのだ。

「……………起きたか」

グレンの側には頼れる元同僚アルベルトが佇んでいた。どうやらあの後自分はアルベルトに回収されたのだとグレンは理解した。

「アルベルトか……………俺は…………どれくらい寝てた」

「半刻ほどだ。その間にリエルはエルミアナ王女を連れ去った様な」

だった1時間それだけの時間でリエルは事もあるうにアルベルトを出しぬぎ、ルミアを連れ去った。平時であるならば勲章ものの活躍であろう。

「……………」

言うまでもなくグレンの気持ちは最悪の域に至っていた。小生意気でいつもこちらをからかっていたあの後輩の死と言う事は、かつての事件を思い起こす程に深刻だった。

「……………まだ間に合うな」

アルベルトは焦りも感じさせない様に冷酷に呟いた。

「間に合うだと？ふざけんな！アイツがアルトが死んだんだぞ！テメエ今度と言う今——」

「知らないのか？」

グレンの焦燥などまるで知った事ではないと言う様な態度でアルベルトが呟いた。その余りの態度にグレンは一周回って冷静になった。

「……………何を？」

「フン……………コイツを見る」

アルベルトは引きずっていたモノをグレンの前に投げ捨てた。人の形をした物体。いやそれはグレンが先程殺される所を見た男……………アルトの体だった。

「……………傷が無いだと」

アルトの体からは活発に活動していた時の色を失い生きている様には見えない。しかしリエルに貫かれた傷が無くなっている。制服は貫かれた跡と血痕が残っている。

「コイツの礼装だ。最後に発動したのは……………四年前俺が殺した時か」

「四年前?……………お前が特務分室にコイツを連れてきた時か!」

グレンが特務分室に入って間もない頃。

アルトはアルベルトによって重要参考人として連れてこられていた。当時のアルトの瞳は狂気に囚われ、グレンですら話しかけるのを躊躇った程だ。

「当時俺はコイツを危険だと判断した。復讐に囚われ目的の為ならどんな事にでも手を染めていたからな」

「だが当時の室長との司法取引の果てに一年後、特務分室入った……………か」

「ああ。心臓を貫いてまだ生きている事に驚いた記憶ある」

「心臓を……………『白魔儀 リヴァイヴァー』か?」

心臓を貫いて尚生きている。そんな事は不死者でもない限りはあり得ない。しかしアルトが不死者である可能性は無い。ならば蘇生されたと考えるのが妥当だろう。

「そうだ。心臓の停止を条件とした条件起動式によって『リヴァイヴァー』を発動させている。必要なマナは両親の形見である礼装の魔結晶に日頃から溜め込んでいるらしいな」

「両親の形見……………か」

「両親による物だからか、親族以外には発動出来ない欠点があるらしいがな」

アルトを再び見ると先程まで色を失っていた体に生命力が戻って

きている様に見える。これ程の事を勝手に行う礼装。最早固有魔術オリジナルと言つても過言ではない。

「……そろそろ起きるな」

「……………ッ！」

アルベルトの言葉と共にアルトの指が少し動き、そして跳ねる様に飛び上がった。額に汗を浮かばせているのはやはり魔術の反動なのか。それともリエルによって命の危機に陥った事による焦りなのか。

「……………やりやがった」

グレンはアルトが顔を歪ませ笑みを浮かべているのを見て目を疑った。今まで死体の様に寝ていた男の態度とは思えない。

「おい、アルト？」

「は、はははははははは！アイツ俺に勝ちやがった。最近妙に成長してると思ったら……もう追い抜かされてたか」

狂っている。親族に殺されかけた事を理解して更に愉快に笑う様は道化の様だ。アルトは真つ当な人間には理解出来ない感情を抱えていた。

「チツ……………正気に戻れアルト。責任は取ってもらう」

「わかってますよアルベルト先輩」

「待て、アルト！お前リエルを殺す気か？」

グレンがアルトの真意を問う。

例え一年前逃げてしまった身だとしてもアルトがリエルに手を掛ける事を見逃す事は出来なかつたのだ。

「僕がリエルを？そんなまさか。連れて帰るだけですよ。僕に勝つたご褒美もあげないといけないので」

「……………そうか」

グレンはその言葉を聞いて安心した。

家族同士の殺し合いなどグレンが許容出来る問題では無い。

「出来るんだな」

「ええ、必ず」

「……………なら何も言わん」

「それはそれとして………下手人は消す」

アルトは小声で呟く。グレンは安心しきっているがアルベルトは気づいていた。アルトは家族を奪われる事が逆鱗なのだ。

控えめに言っただけアルトは………ブチギレていた。

殺意MAXお兄ちゃん

グレンは疑問を持っていた。

アルトⅡマツバの配属は司法取引の末に行われたけれども、正面戦闘に明るく、白魔術での治療も高い精度を誇っている。彼の職の適性は専ら要人警護に向いている。

素人が聞いたとしても同様の事を思うだろう。

そして帝国軍の中で配属するのなら何処に行くべきか、と言われれば真つ先に女王親衛隊が挙がる。

老いたとはいえ国の英雄と正面から殴り合える戦闘能力は帝国の頂点である女王を守るのに十分、いや最適と言ってもいい。

しかし所属は帝国軍の暗部として名高い帝国軍魔導師団特務分室。イグナイト家との交渉の為に分野が違った特務分室に所属しているのだろうとグレンは予想していた。

目の前には惨劇が繰り広げられていた。

突入した研究所内で現れた異形^{キメラ}の生物。

皮膚には高い魔術への耐性を持ち魔術を使って倒すのは無理とは言わないが難易度が高い。

しかしアルトはそんな生物相手にも物怖じせず突撃し、舞う様に全てを虐殺した。

正面から向かってくる異形には貫手が魔術を阻む装甲を引き裂き心の臓を握り潰す。異形が敵を噛み砕かんと口を開けば開いた顎を腕を振るって断裂する。背後に寄った異形は踵によって頭部を果実の如く叩き割られる。

アルトの足元には数えるのも億劫な程、肉塊が転がっていた。その返り血を浴びアルトの制服は赤く染まった。

おそらく1日前のアルトが事に当たったならば首を締め落とし殺

すだけで済んだのであろう。実際グレンが知るアルトの魔獣に対する対応はそんな所だ。

しかしグレンは不思議とこの戦い方が不自然とか、らしくないとは思わなかった。

寧ろその振る舞いにはなんの制限もない解き放たれた獣。グレンはアルトの命をなんとも思っていない様な戦いこそ特務分室に引き入れられた要因なのだと感じた。

そしてグレンはそれを見てアルトが言いそうな事を思い付き……ある事に気付いた。

『まさか……いつ、リエルへの教育に悪いからこの戦い方を封印してたんじゃ……』

気のせいだと思いたい。

家族のリエルが奪われて気が立っているから多少は乱暴になっているだけだと……しかしグレンの勘が限りなくその推測が正しいと納得していた。

「……ふう、行きましょう。日の出までに帰れば何事もなく旅行を楽しめます」

「流石だな、衰えもなく更に研ぎ澄まされている」

「そうですね、あれだけリエルと立ち合っていれば、衰えると言うこととはないでしょう」

「嘘だろ、まだ成長するつもりなのかよ……」

「もちろん。それに合わせてリエルも成長するでしょうし、グレン先輩ももっとと向上心を持たないと……死にますよ?」

「……ガンバリマス」

グレンは確信した。

今、この事件を解決しても自分に平穏など訪れない。リエルを連れ帰るのはいい。大切な仲間だから助けたいと思う。だが、その後どんな仕打ちが待っているのか……頭の中をアルトの「致命傷まではセーフ」と言う有難い言葉がぐるぐると回った。

一向は更に研究所内部を進み、ある部屋に辿り着いた。

無数の水槽が立ち並び、水槽の中のモノを生かそうと稼働している。薄く光が灯る水晶の光源が照らしているのは……人間の脳髓だった。

「……………」

「どうかね、私が選り好んだ実験材料達は？」

不気味な実験室の中央に待っていた男。

この白金魔導研究所の所長。

ボックスIIブラウモンが待っていた。

「お前……人をなんだと思っていやがるツ」

「彼らの事かね？私の崇高な研究に貢献出来たんだ、寧ろ光榮に思っ
て欲しいね」

「ツ……………」

余りの物言いにグレンは口を噤まずにはいられなかつた。

水槽を暫く見ていたアルトがボックスに目を向けた。

『感応増幅者』『生体発電能力者』『発火能力者』……異能者の研究で
すか……………」

「私の研究に興味があるのかね？ならば教えてくれよう！どうせ貴様
らはここで死ぬ定め。研究成果を教えたところで誰かに話す事すら
出来んからな！」

「……………」

ボックスは懐から注射機を取り出して、自らに突き刺し中に入つて
いた薬物を注入し、その後ボックスの体がメキメキと音を立てて膨れ
上がっていく。

「ハハハハハ！これこそ我が研究の成果！魔術を遥かに凌ぐ性能を見
せる異能者達の能力をこの身に再現したのだ！」

「……………無能ですね。心配して損しましたよ」

許せない行為ではあるけれども、アルトの想定する最悪には達して
いない。

「何？この私が無能？やはり所詮は軍の犬か。この崇高な研究を理解できないとはなッ！」

「……………どれだけ減らず口を叩こうがお前は■■■■以下だよ」

「……………ッそれならばその身をもって我が魔導の威力を見るがいい！」

アルトが小声で口にした言葉に反応しバークスの肉体から極大の炎が放たれ、着弾と共に爆発。三人はその場から飛び退く事で回避を行い、物陰に隠れた。

「チツ、面倒だな【愚者の世界】じゃあ、無効化出来なそうだ」

【愚者の世界】は一定範囲内の発動する魔術式を停止させる魔術。すでに発動した魔術、魔術薬による体質の変化などは防ぎようもないのだ。

「確かに、今回はグレン先輩をメタって来たみたいですね……………アルベルト先輩」

「何だ？」

「……………殺しても？」

「……………構わん」

「じゃ、一人でやりますね」

二人は物陰から出て行くアルトを引き止めなかった。相手が誰であろうと、アルトが出来ると思つて申し出たなら手を出す必要はない。三年間一緒に働いた上で勝ち得た一種の信頼だった。

「作戦会議は終わったかね？出てきたのが一人……………不意打ちでも狙っているのか？」

「いいえ？アンタを殺すのは俺一人で十分だと判断しただけですよ」

「ツこのガキ一々感に触る言い方をしておつて。そんなに殺されたいなら望みどおり！」

安い挑発にのつたバークスはアルトへ向け、研究の成果を放つ。紫電が、冷気が、爆炎が室内を埋め尽くした。

以前までならバークスとアルトの戦術上の相性はバークスが有利だったのであろう。どれだけ傷を付けようと元通りになつてしまふ再生能力はアルトにとつて面倒である事は確実、長い長期戦に持ち込めば近接メインのアルトが例え勝つたとしても傷を負うのは必須だった。

二度、アルトがバークスに接近し頸動脈を搔つ切つた。

けれども再生能力は衰えを見せない。アルトは『生体発電能力』によつて左腕が動かなくなつた。

「……………掴んだ」

爆炎がアルトのいた位置を包み込むと同時にアルトは姿を消し……………バークスの正面に降り立つ。

「フンッ！無駄だ。焼け死ね！」

バークスが動くより先にアルトが自らの左腕を切り裂きながら駆け抜け、自身の血液をバークスの眼球に直撃させた。

水滴で小さな斬撃を作り出す武術、バークスにとつては直ぐに再生出来てしまう様な小さな傷だ。だがその一瞬、目を潰された一瞬が命取りだ。

バークスはアルトに二度接近され傷を負わされた。

だが致命傷には至っていない。その事実が油断を仰ぐ、例え接近されようと殺される事はないと慢心していた。

背後からバークスの脳髓を右腕が貫く。

この程度では再生出来てしまふ。そんな事実は二度の接近で証明済だ。だから更なる手を加える。

「……………《焼け死ね》」

黒魔『ブレイズ・バースト』その爆炎がアルトの右腕で炸裂する。その技術は確かにかつての英雄が使つた技術。魔術を拳に乗せて放つ技『魔闘術』だった。

頭部が破裂し凄惨な模様を描く。返り血がついたがアルトは気にした様子もない。

「終わりましたよ?」

「……………うん、ヤベエ……………ザマアとか思っただけど普通にグロすぎる」
「気にする必要無くないですか?そんな事」

殺せば生物は只の肉塊だ。利用価値もない奴なら尚更である。

「(コイツ、リエルの為にどんだけ制限してたんだよ)」

グレンは今後の生活でもアルトが変化する事に、また給料が減る事態になる恐怖に震えていた。